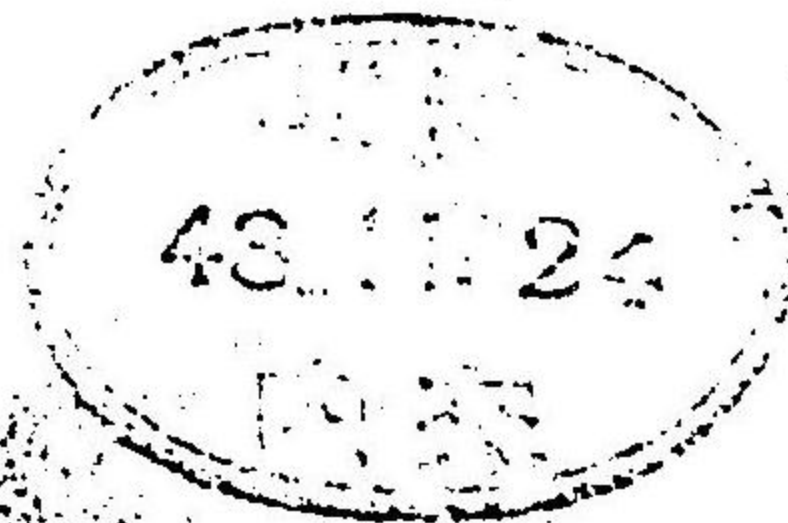
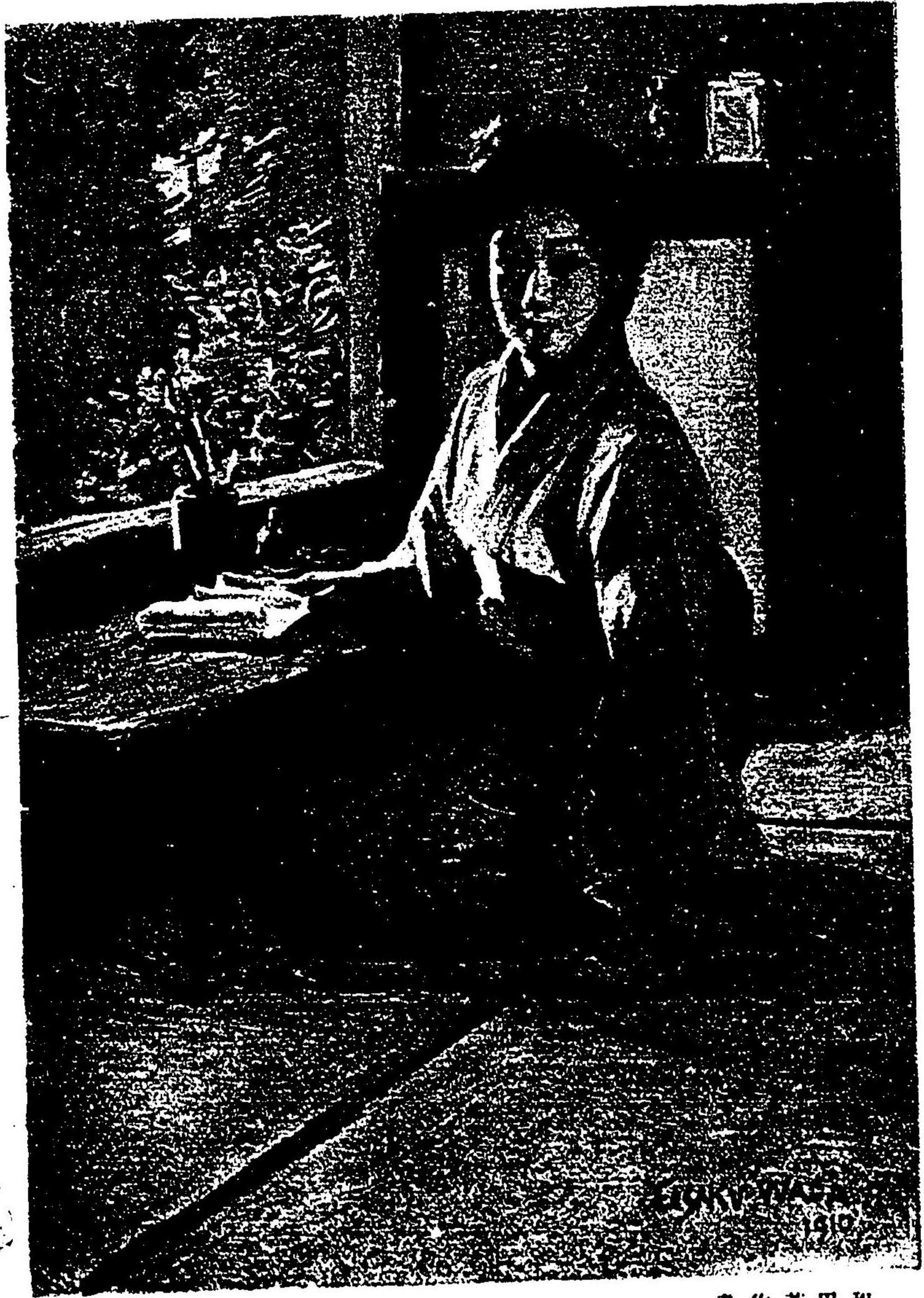


1982



著 袋 花 山 田



和英田作畫

和英田作畫

敏子トハ

敏子の愛する人

和英田作畫

And

「……それだけでも、もう、我々は青年ではない」  
 さすがに其頃が思はれるといふ風で、都から来た男は言

「兎に角、かういふことを平気で言はれるんだからねえ」

「いやなことも言つた。」  
 ろいろな話もした。三年前には顔を赧らめずには言はれな

「さうだねえ」  
 「もう我々には、青年といふ心持が全くなくなつたねえ」

かう言つて、二人は今更のやうに顔を見合せた。随分い

*focus*  
*Completion*  
*Precipitation*  
*Deposition*  
*Supernatant*  
*Residue*

つた。何となくあたりが振返へられるといふやうな気分が  
一室に充ち渡つた。戶外には秋雨が蕭々と降つて居た。

『三四年前までは、まだ我々の後に新しい時代があらう  
などとは思はなかつた。我々が新しい時代だつた。我々は  
せつせと新しい時代をつくつて居た。それが今ではもう我  
々の後に青年の群がある。』

『第一、心地からして違つて來た。』

と田舎の寺にかくれた一人が言つた。

二人は若い頃からびつたりと心を合せて來た。互ひの境  
遇の相違から、考へも心の持方も大分違つて居たが、その  
親しい間柄はつひぞ今まで破れたためしがなかつた。都か  
ら來た男は寺にかくれた方の男の妹を妻にして居た。  
大きな庫裡の天井は高かつた。二人の坐つて居る室の向

3

ふには、田舎寺に特有な廣い勝手が見えて、其處に鶏が二  
三羽餌をひろひながらコ、と聲を立て、居た。明放した勝  
手の大和障子からは青々とした鳥が見えた。

木犀の匂ひが古い室の空氣に微かに交つた。

『いつ頃から、さうした心持になつて來たか、それは自分  
でもはつきりと言ふことは出來ないねえ、君。それやねえ、  
君、辿つて考へて見れば、わからないこともないが、それ  
がある分明した動機とか事實から來たのではなくツて、い  
つの間にかさうなつて居るんだからねえ』

都から來た男がかう言ふと、相手は笑ひながら、

『しかし戦争に行つた頃から、大分、君の思想が變つて來  
たやうだつた。』

『戦争？、戦争に行つた影響はそれは確かにある。何しろ、

三羽餌をひろひながらコ、と聲を立て、居た。

砲弾の中を歩いたんだからねえ。影響がない譯には行かないさ』と言つて、少し考へて、『それにしても、あの時分のことが思ひ出されるよ。チブスになつて、病院の蚊帳の中に寝て居た時、僕は君の此の寺のことはかり考へて居たからねえ……いよ／＼死ぬに決つたら、遺言を書いて、君の此寺に埋けて貰はうと思つて居たよ。』

こんもりとした此寺の杉山の中に暗い暗い墓地があつた。草藪がいつもガサガサと風に鳴つて、夕日が色附いた下草を微かに染めた。其墓の中に自分の名の刻まれた一基の石碑！かれはさういふ風に想像した時の事を思ひ出さずには居られなかつた。かれは續いてそれから経過した四年間のことをたどつて見た。

『自分の周囲の人の死んで行くといふことも、君、人間の

思想には随分關係があるものだねえ』  
四年間——其間に叔父も死んだ。兄も死んだ。かれは其度に味つた暗い感じを頭に繰返した。

都から此處まで来る汽車は三時間かゝつた。途中には別に見るやうなものはない。電話の鳴る忙しい一室から、旅客の混雑と集る小さい停車場、いつも空いて居る二等室に入ると、かれは全く世から懸離れたやうな心持になつた。それでも町の場末を駛つてゐる間は、黒い煙の簇々と立のぼる煙突が見えたり、トタン屋根の低い裏長屋の貧しい生活が見えたりした。直線の川に添つた真直な路に、い、て、今度は櫻の栽られた長い土手が見えて、その向ふの大川の流れの上に、白帆がチラ／＼と並んで通つた。

川向ふの紡績會社らしい工場から、眠さうな汽笛がポーと長く川にひびき渡つて聞えた。

『都會——都會のひびき』

其の響も段々遠くなつて行つた。野には青々とした島が續き、その縁をとこるところ榊樹の疎らな林が縫つた。白楊で圍まれた新建の小學校の廣場には、生徒が鬼事などをして遊んで居た。

到る處の停車場の白い札は、その近所に名高い寺があつたり、桃の名所があつたり、藤の名所があつたりするのを段々に知らせた。やがて汽車の響がゴ—と高く鳴り渡る。と、其處に藻の青く見える古い川がひらけて、橋の袂に藤棚のある涼しさうな料理屋の座敷がそれと見渡される。をりをり通る町には、白壁や半鐘臺や中學校らしい建物。

が屋根の上に高く出て居る。

何も眼に留るやうなものはないが、平野らしい特色はないでもなかつた。春の浅い頃に、低い丘に固つて真白になつて梅の咲いてゐることもあれば、げんげが真赤に一面に咲いて居るのを見たこともある。それに、一時間、二時間小さい停車場をも幾つか過ぎて、夕日が斜に空いた車室にさし透る頃になると、この廣い平野を縁取る環のやうな山々が、はつきりと紺碧の色を遠く其前に展げて見せた。今日も山が見事だつた。此の線路には他に見るものはないが、山だけは立派だね、君。山を見ると、すつかり世の中のことを忘れて了ふね。都の男は来る度に、かういふ風に田舎にかくれた友に言つて聞かせた。

汽車が其停車場に着くかなり前から、かくれた友の田舎

寺のこんもりとした森は見えた。丁度其頃汽車は珊瑚樹や竹藪の多い村を通り越さうとしてゐるが、其處に来ると、かれはいつもきまつて立上つて、網に載せて置いた風呂敷包を取つて膝の上に乗せた。其中には新刊の雑誌や書籍や土産物や寺の娘にやる菓子などが入つて居た。埃の白い真直な街道が線路と交叉して、南から北へとついで居て、其向ふに、夕日を帯びた町の家並が見えた。段々近づくにつれて、寺のさまは歴々と眼に映つた。森の中に本堂が見える。庫裡が見える。山門から通じた長い舗石道がそれと指さされる。鐘樓の小さい釣鐘も見える。山門の白壁の塀は殊にはつきりと目に立つた。停車場の驛員達は、驛長と言はず、助役と言はず、總てかれの顔に熱して居た。けれど別に言葉をかけ合つたこと

があるのでもなかつた。「お寺のお客」人々は汽車から下りる其姿を見ると、いつもすぐにさう思つた。仲賣の男は、「何ういふ商賣をして居る人だんべい」などと言合つて其後姿を見送つた。

停車場から近路を取つて、桑島と寺の周囲の漆との間の細い路をたどると、篠竹だの、野椿だの、櫓の低い榊樹だのがガサガサといつも音を立てゝ居た。

かれは漆を跨いで、其淋しい墓場を抜けて行つた。寺は常にしんとして静まり返つて居た。落葉が本堂の前を舞つて通つたり、雨が閉め切つた黒い障子に降頻つて居たりした。鶏が餌をあさつて居ることさへ滅太になかつた。庫裡の玄關の白壁にはいろいろな落書がしてあつた。天

氣の好い日には、何うかすると、其處に子供が二三人遊んで居ることがある。其中には吃度寺の一人娘が交つて居る。娘はさびしい寺の夫婦の唯一つの慰藉でもありまた誇りでもあつた。娘は色が白かつた。

娘は其時は吃度東京から来た叔父さんを逸早く見附けて、

「父さん——東京の服部の叔父さんが」

かう言ひながら奥に駆け込んで行くのが例であつた。

しかし大抵は玄關の隣の狭いくいを明けた。古い埃の臭ひが先づ第一に客の鼻を衝いた。かれは案内をも乞はずにヅカヅカと上にあがつて行つた。時には細君が慌てゝ迎へに出て来ることもあれば、主僧が喜ばしい色を満面に湛えて、『よく来たな』と言ひながら、其儘座敷に連れて行くこともあつた。火災に逢つた本堂は明治になつてから新に



建てかへたものだが、庫裡は百年以前の建物で、何の室にも古い一種の臭が充ち渡つて居た。それに寺には寺男が居なかつた。

かれ等は夫婦の生活に必要な間だけ雨戸を明けて掃除した。二階や奥の間などはいつも雨戸が閉切つたまゝで、古い駕籠や佛書の入つた本箱や、歴代の什物の入つた古長持などで一杯になつて居る。

錆び果てたその古寺の臭、それが東京から来た客の氣に入つた。

今の此寺の生活の狀態に引較べて、客はいろいろと主僧の身の上を考へて見ることがある。此寺も昔は榮えたことがあるといふ。境内に今もある不動堂、其前に十軒ほどある長屋、其長屋の中に残つて居る白壁の崩れかゝつた家屋

は、其の榮えた時分の名残だといふ。其頃主僧は十七八で、玄關の傍の小僧部屋に起臥して居た。不動堂は先代が門前の繁榮を謀る爲めに、わざわざ成田から勧請したもので、參詣者の鳴らす鰐口の音は曾て絶えたためしがなかつたほどであつた。それに門前には湯屋が出来たり、料理屋が出来たり、白粉を塗つた色の白い女が出来たり入つたりした。世話人の娘が同じ世話人の子息と墮落をして、近所に隠れて居たことなどもあつた。先代にも大黒ともつかず妾ともつかぬものが二三人は居た。丁度其頃は維新になつて僧侶の權威の全く保たれなくなつた時代であつた。主僧は寺の娘と戀に落ちた其時分のことをある時酒に酔つて客に話して聞かせた。其室は依然として元のまゝである。對座に耻しいうれしい言葉を交した圍爐裏も其まゝになつて居る。

「色の白い、眼の際立つて美しい娘だった」などと笑つて  
主僧は話した。

「それから、門前の茶屋の女は遊ばれて仕方がなかつたも  
のだ。夜などうつかり歩いてゐると、突然ぐつと抱緊めら  
れて、白粉くさい顔を押附けられた。それには困つた」こ  
んなことも言つて聞かせた。

何う見ても田舎寺の和尚さんといふ風はない。昔二人が  
早稻田の郊外や牛込の狭い室で感情的に話し合つた調子が  
まだ何處かに残つて居た。葬式が来る度に、僧衣の上に金  
襦袢の袈裟をかけて、白足袋を穿いて、長い廊下を本堂へ行  
くのを見ると、何だか丸で別の人のやうに思はれた。歌を  
詠んだり、新體詩を作つたり、スアルケンベルグの哲學史

を抱へて、茗荷畑の中の道を學校の講堂に急いだ山崎雍之  
助とは何うしても思はれなかつた。

「山崎は矢張何處か暢氣なところがあるねえ。あれは幼い  
頃から寺の教育を受けた影響だねえ」と其時分から夥伴の  
一人が言つた。それを都から来た服部清は、今になつても  
時々思ひ出した。清はその世に懸け離れた心を羨んだり尊  
んだり氣の毒に思つたりした。

十三年の歳月は短かくはなかつた。さまざまの世態や  
事件が其前に展けた。明治の思想もいろいろな變遷を見せ  
て、社會主義が起つたり、日露戦争があつたり、自然主義  
が其萌芽を出し始めたりした。友達の群にも榮達したもの  
もあれば、零落したものもある。しかしかくれた人に取つ  
ては、そんなことは何うでもないやうに見えた。寺の不動

堂の高い縁には、矢張朝毎に子守の唄が聞え、勝手のとやでは暗い中から鶏が曉を告げて鳴いた。

前の井戸端で顔を洗つて居ると、都に行く一番の上り汽車が、野に満ちた朝日に白い煙を光らせながら、轟々といつも音を立てて通つて行つた。

清はこのさびしい寺の境内を歩きながら、いつも都の活動を思つた。活動の巴渦の中に居ては解らない活動の状況が此處では分明と眼に浮んで来るやうに思はれる。電車の中にチラチラする色彩や、其日其日の忙しい勤めや、片時も人の心を安ませまいとする物の響や、電燈の明るい光の下で見る美しい女の顔や、それらの中にイライラした自分の姿が其處にも此處にも見える。何處とも分らぬ町の狭い通の角が見えるかと思ふと、今度は馬車と埋まるばかりに

混雑した橋の上がちらと浮んだ。

二はいつも酒を飲んだ。清は此處に来る時にはきまつて牛肉か何かを買つて来た。それをジワジワやりながら、「何うもお寺でかういふ匂をさせてはいかんねえ。…何うも感じがよくない」などと言ひながら、旨さうにしてそれを食つた。田舎には食ふやうなものは何もなかつた。鯉のあらひ、鮎のあらひ、それも何うかすると泥臭かつた。利根川で「あいそ」の獲れる時には、それを骨折つて町中を探して貰つて、鹽焼にしたり、ぎよでんにしたりした。けれど一番旨いのは矢張晩春に獲れる鮎子であつた。時節になると、利根川の土手には、屹度鮎子小屋といふものが懸けられて、轆轤で巻き上げられるやうに出来て居る大きな網を上げる度に、金色をした小さい魚が潑潑として春の日影

に光つた。二人は散歩の次手に、其小屋に寄つては、いつもそれを買つて来た。

三

利根川を渡つて一里ほどの處に、清の生れた故郷の町があつた。清は雍之助をよく其處に連れて行つた。「僕の故郷はもう本當の故郷になつて了つた。家はあつても他人が住んで居るし、親類はなし、幼友達は皆な僕の顔を忘れて了つたし。何んなことをして歩いても構はない」こんなことを言ひながら清は町の大通を歩いた。

四辻の角に里程標が立つて居たり、種物屋の赤い暖簾に白く字が浮き出して居たり、呉服屋の店に小僧があくびを



加減ですぐほごされて了ふものもある。結ばれる運命を持つて居ながら一生結ばれずに終つて了ふものもある。一度結ばれたが最後、もう何うしても解れなくなつて困るものもある。ぶつくり切れて了ふものもある。「さうかな……この友と自分と自分の妻と……さうかな、一生何んなことがあつても解けない連中かな」清はかう思つて見た。何だか其束縛が苦しいやうな氣もした。

ある想像がかれを利根川の渡場につれて行つた。其渡場には小さい小屋があつて、蘆荻が高く岸に繁つて居た。渡船は今出やうとして居た。自轉車を載せて居るものもあつた。船の中には此處等に見馴れない若い一人の庇髪ひがみの女が乗つて居た。其女は海老茶の袴はかまを穿はいて、細い編織あみ織傘を片手に持つて、片手には薄い一冊の書を持つて居た。

それは清が十年前に書いた「故郷」といふ小冊子であつた。其故郷の田舎町を女は遠くからわざわざ見に来た。これは複雑した糸の關係を考へずには居られなかつた。

歩きながら二人は其女のことを話した。

「また出て来るつて言つたが、何うしたねえ？」  
 「來年になつたら、出て来るんだらう。山の中に引込んで居ては、淋しくつて仕方がないつてよく言つて来るよ……。來年になつたら、親が許さうが許すまいが無理にも出て来るつて此間も言つて來た。」

「一體あの二人の關係は何うなつて居るんだえ？ 手紙にはそんなことは書いてないかえ？」  
 かう雍之助が訊いた。

「別に書いてはないが、矢張り思つて居るらしいねえ。けども今度出て来たたら、まさか前のやうなことは無いだらう。山の中に一年以上もじつとしてさびしく暮して居るんだから、今少し自己を顧みて見るといふ處が出来たらうと思ふねえ。それに、其點は僕も呉々も言つて遣つた——」

「けれど一體女が文學を遣ると言ふことはむづかしい話だねえ。あの人の將來の爲めから考へて見ても、最初の過は改めるとして、田舎で相當な處に嫁いて了ふ方が幸福になる道だと思ふねえ」

「幸福と言つたら、さうかも知れん——しかし」

かう言つて清は言葉を留めた。

少時歩いてから

「僕はしかし出て来る方が好いと思ふねえ。第二、田舎に

氣に入るやうな相手があるやうな女ぢやない。それに第一歩は過つたにしても、東京に出て来て、自分も勉強するし、相手の男も眞面目に其問題を解決しやうとするなら……二三年の後、双方の心持を聞いて見て、一緒にして遣つたツて差支ない」

「それも好いだらうけれど……」

「理想に過ぎないかねえ？」

「まア、さうだね」

と雍之助は笑つた。

「しかし、僕にはかの女を幸福にしてやる責任があるんだ。僕を便つて来た女、僕に一生の運命を託さうとした女、その女を單に藝術の犠牲にして、それで好いとすましてゐることは出来ない。僕は責任を感じて居る。」

「しかし、それは君に責任があると言ふ譯ではない。君の藝術の材料になつたと言ふことは、さういふ事件を藝術家たる君の眼の前に廣げて見せたからだ。唯それだけだ。君には責任といふほどの責任はない。」

「さう言へば、さうも言へる。僕もさう思つて自から安んじて居る時もある。しかし實際のライフ——一人の一生、それと藝術と何方が貴いだらうか。何方を重んじなければならぬいだらうか。……藝術家から言はせれば、無論藝術が貴いと言ふに違ひない。思ひあがつた藝術家の中には、人生は藝術の模倣だ杯といふものさへあるからな。けれど僕は藝術家といふ名に空虚を感じて居る一人だ。何故、藝術家は普通の人のやうに全力を捧げることが出来ないのか。何故馬車馬のやうに傍目も顧みずに進むことが出

来ないのか。何故その實際の巴渦の中に入つて生又は死を経験することが出来ないのか。僕は何故かの女を熱烈に愛することが出来なかつたか。僕は此問題に邂逅すと、いつもさういふ風に考へるよ」

「それは藝術家と言ふ點よりも、君の性質にあるのぢやないかねえ？」

「それは無論さうさ」かう言つた清の顔には血が上つた。やがて一種の冷笑を面に見せて、「僕は拙い出来損ひの藝術品と血もあり肉もあるラツとを交換した馬鹿な男だ！」

「相變らず極端に物を考へるねえ」

かう言つて雍之助は笑ふと、

「だつて本當にさうだもの仕方がないさ。二三年來の僕の



新しい血は、實際あの女が湧かして呉れたんだもの……。  
 僕の書いたものに、少しでもフレッシな鮮かな感があると  
 すれば、それは皆なあの女が僕に與へた印象から來て居る  
 んだからねえ」

清はこんなことを平氣で言つた。それほど二人は平生心  
 を打明けて居た。妹の知らぬことも兄はよく知つて居た。  
 清に取つては、義兄と言ふよりも昔の親しい友といふ間柄  
 であつた。

二人は黙つて並んで歩いた。

「しかし、僕は……」と清は再び言葉を續いで、「僕は今で  
 はかれ等の爲めに心から力になつてやらうと思つて居る。  
 二人が幸福に生活するといふことを望む僕は神かけて祈つ  
 て居るねえ。一體僕が馬鹿さ。人の物笑ひになるやうな馬  
 鹿さ。」

鹿々々しい幕を打つて見せたのさ。しかし、僕にも利益は  
 あつた。物に對する見方や考へ方がすつかり一變したばか  
 りでなく、僕の心持ちをも全く新らしくして呉れたからね  
 え」

「そして男は今何うしてるんだえ？ 矢張文學を遣らうッ  
 て言ふのかえ」

雅之助は急に話頭を更へた。

「さうださうだ……。早稻田に籍を置いてるんださうだ。」  
 「君があゝの作を公にした時、其男に對する觀察が違つて居  
 るとか、あんな男ぢやないとか、随分いろいろな批評が出  
 たが、實際何んな男なんだえ？ 有望な男かえ」

「さうさねえ、僕にもよくは解らんがねえ。しかし出來の  
 悪い男ぢやないんだらう。あの作には無論其男が十分に書

けて居ない」

「あの作が出てから逢ったことがあるかねえ？」

「ある、一度ある」

かう言つて清は其時のさまを思ひ出すといふ風をして見せた。

「何處で逢つたえ？」

「電車の中で鳥渡逢つた」

電車の中で一種不思議な間の抜けた挨拶をしたことを清は思ひ出した。女が父親に連れられて山の中に歸つてから、其當座は其男はよく清の家を訪ねて来た。清に逢つて其の戀の糸を手繰るより他にかれには女に近寄る筈がなかつたのであつた。しかし其作が出てから、其状態は全く一變した。其日は清は例の橋際の電車の停車場から乗つた。處が

花畑のえのめ面相...  
清は...  
...

其處に其男が早稻田大學の新しい角帽を冠つて、久留米耕の畜生羽織を着て乗つて居た。お互ひにはつと思つたが、しかし知らぬ顔をする譯にも行かなかつた。男が先づ挨拶をした。清は軽く「ヤア...」と言つた。

「それで十分ばかり黙つて乗て居たよ」

「何も言はずに...」

「無論さ」

「それは可笑しかつたねえ」

「餘り好い心持のものでもなかつた。」

「それはさうだらうさ。」と雍之助は笑つて、「言はゞまゝ、競争者だからねえ」

「いや、競争者と言ふほどの烈しい感情でもなかつたねえ。これが、同じ年輩で女との關係が深くなつて居ると言ふの

なら、それはさうした心持が湧くに相違ないが、僕のは其時は寧ろ自分の愛して居るものを毀損した男といふやうな軽い憎悪の念——娘を誘惑した男に對する親父の憎悪の念、それに似たやうな心持が其男に對して起つた。」

「それでも、君の家に置かうと言ふのかえ？」

「それはまだ考へて見たこともない。来るか来ないかもまださまらないのだから……。まさか親の許さないものを、僕の家と呼寄せることも出来ないからねえ」

「僕は餘り關係せずに置く方が好いと思ふがねえ」

「僕もさうは思つてるのさ」と言つた清の聲は低かつた。

「しかし、僕にしては、何うかして幸福にして遣りたい、成功させて遣りたい、此儘放つて了ひたくない……。だから、

ら、此間もさう言つてやつた。藝術を修養するとかふ方面に於ては、いかやうにも御世話にするが、實際の方面は、自分で責任を感じて、自分で其始末をつけて行くやうにしなくつてはいけなかつて……」

「ところが、それが旨く行くか何うだか、知る程間だからねえ」

「旨く行かなくつたツて實際の方面は僕は關係せんから好いさ」

「さうは行かないよ」

「種族を出さないやうにするなら、何んなことでもするが好いさ。僕は今度は何も言はない。知らん顔をして居るよ」

「君にそれが出来るかねえ」と雅之助は笑つた。

清は心と言葉とは一致し難いものだと思じた。かれの頭には山の中のさびしい町のさまと長い廊下の盡頭にある二畳の一間とが歴々と見えた。其二畳の間には、小さい机が置いてあつて、雑誌や書籍や文反古が一杯に散らしてある。退屈すると、其處から女は出て來た。髪の亂れた白い顔を秋の夕日が照した。

薄闇にけしきつたり、其のまゝあり

停車場から其山の中の町までは十二三里あつた。かれはある時車で其處を通つたことがある。最初泊つた處は、山の麓にある狭い汚い町であつた。夜もすがら落葉の音がサガサ聞えた。「木下の娘さん、此處等でも評判の娘さんですかな。學問がえらうお出來なさるッてな。此間もお母さんと泊つて行きなはつた」など、旅館屋の娘が言つて聞かせた。あくる日は山と山との間の谷のやうな處を通つた。

小さい時には休茶屋があつた。明るい秋の日影に薄白い雲が懸つたり晴れたりした。町に入つたのはもう午近かつた。かれは其處に遇した二日二夜のことを考へずには居られなかつた。暖かい家庭とやさしい父母、それすら戀の爲めには辛い束縛であると言つた女のことをかれは考へた。

「今少し時節を待つてお出なさい」

其時、かれは女に向つてさう言つたことを思ひ出した。かれは成たけ其問題には觸れないやうにして居た。男の話もつとめて成たけ爲ないやうにした。二階から細い廊下、それを通越すと、其處には廣い湯殿があつて、湯氣が微白く颯つて居た。湯氣に曇つた大きな鏡の下には、白粉や櫛や石鹼が混雑と置いてあつた。何うした聯想か、それが今はつきりと清の眼の前を浮んで通つた。

氣が附くと、二人は狭い町の通を歩いて居た。寺の門が  
其の近くにあつた。銀杏の見事に黄葉したのがあたりを朝  
るく見せた。

清は雅之助に言つた。

「それが僕の家の寺だ。入つて見ないか。」

四

此處には幼くして死んだ姉の墓があるばかりであつた。  
一家が都に出てからは、何年にもお参をしたものもない。  
しかし墓石は倒れても居なかつた。

清は自分の幼ない時のことを友に話して聞かせた。寺の  
隣は小学校で、よく此寺の中を抜て近道をして行つたこと  
や、いたづらな子供が墓石を倒すのを和尚が怒つたことや、  
母親と一緒に盆に御墓参に来た時のことや、それからそれ  
へと話が盡きない。「この姉の夭死した後の腹に僕がすぐ出

来ることになつたのだ。この姉が死なずに居れば、僕は今時分こんな處にまごまごして居なくつても好かつたんだ」かう言つた清は、墓石の前を立去りかねたやうに見えた。「そら見給へ、明治四年一月と書いてあるだらう。僕は明治四年十二月生れた。ライフと言ふものは面白いものだねえ。」其聲には過去の追憶の悲哀が籠つて居た。今日に限らず、故郷の町を歩く時は、清はいつもかうした調子であつた。ひどく感情的になつて、初恋の物語や一緒に遊んだ友達の話やらをした。此處には上品な白蠟の箱と奇麗な娘の兒がさびしく暮して居た。此處には早く死んだ同級生の娘が住んで居た。此處は初恋の女がよく通つた路だ。總てかういふ風に清は連れ立つた友に話して聞かせた。

「フム、フム」

と雍之助はいつもそれを聞流しながら歩いた。雍之助の眼には唯のさびしい田舎町としか映らなかつた。古着を遠くから仕入れに来る町、麥落雁といふ菓子が出来る町、「麥飯とろにたんとたん」といふ俗語のある町、それ以上之餘り多くの興味を惹かなかつた。それでも沼を隔てた桃の花や脚鞠の花の盛りを見た時には、成程これは名所だけあると感心した。それから二人はきまつて軒燈や御神燈の出で居る細い通を歩いた。御神燈にも軒燈にもいろいろな女の名が書いてある。それは大抵板葺の間の狭い小さい家であつた。中には葉葺の汚いのもあつた。二人は玉かつみの小照といふ藝者を知つて居た。

別に來歴といふほどのこともなかつた。二三年前、新緑の頃に、矢張二人は此處に遊びに来て、町の料理屋で午飯を食つた。その時その小照が出て酌をした。東京の者で、一月ほど前に來たといふ話をした。それに何處か人を引付けるやうなところがあつた。二三度來る中には、段段面白い氣象だといふことも知れて來た。「小照のお酌で、酒でも飲んで來るかね」などと言つて、二人はよく出かけて來た。料理屋は町の裏のところにあつた。其の奥の一間の静かなのを二人は常に選んだ。其處からは裏の大きな樹の梢の日の落ちるのも手に取るやうに見えた。冬は西風が凄じい潮のやうな音を立てた。

「誰も知る人のなくなつた故郷に、かうした新しい知人が出來るといふのも面白いことだねえ」

清はこんなことを言つて見ることもある。

神樂坂にも住んで居たことがあつて、金色夜叉の作者も知つて居るなどと小照は言つた。「其時は私はまだかういふ商賣をして居なかつた時ですからねえ。……彼處に大弓がありましたねえ。よく彼處に來て居らやつたものですねえ。」

またある時は、  
「彼處にしろ粉屋があつたでせう。船橋といふ肥つた上さんの居る菓子屋があつたでせう。さうさう、角の葉茶屋の若い上さん、あの上さんはあれで若い時は中中好い娘でしたよ。」

段々心が置けなくなつて來た。時には小照の方から身の上話などをする事などもあつた。「貴郎方、御商賣で時々

戸時は...

「入らしやるんですか」かう聞いて見ることもあつた。  
座敷に入りながら、

屋山

「まア、皆さんでしたか」と莞爾と笑つて見せて、「今日は何でも久しく御目にかゝらない方に能度達とふ今朝からちやんと知れて居ました」

沼の向ふの躑躅の咲く頃には、こんな町でも人が彼方此方から入込んで来た。時節になると、料理屋で、一時雇ひの酌婦を五六人も殖やして、更代に山の方に出張させるやうにした。山には大きな二階建の出店があつた。何處の間からも沼が見え躑躅が見え渡船が見えた。小照は町の外れの辨天祠のある處から、小さい田船に乗つていつも出掛け

た。  
其頃には水草の新芽ももう大分出て居た。菱だの、草菜

だの、藻だの、葦だのが其處にも此處にも浮いて見える。二人は其の花の時分にもよく出かけて行つた。小照が一日隔きに乗つて行く其の汚い田舟にも乗れば、その大きな二階屋の廣間の混雑した中で酒を飲みもした。その時には、小照は屹度出て来て挨拶をした。「花の時分はゴタゴタして居て仕方がありませんねえ。……一日手傳つて歸ると、體が綿のやうに勞れて了ひますからねえ」などと言つた。二人は来る時は、「小照はまだ居るかしらん。もう東京に歸つたかも知れない。」などと言つて遣つて来た。

小照の顔を見ると、

「まだ居たねえ」

といつもなつかしさうに言つた。

「もうねえ、餘り長くなりますから、東京に歸りたいと思



つて居りますけれど………  
支度までしたんですけれど」  
『まア、今少し居るさ』

此間などももう歸るはかりだ、

「まア、今少し居るさ」  
かう言つて、二人は酒を飲んで行つた。  
一二年の間に此町にも少なからぬ變遷があつた。利根川の  
手前でつかへて居た鐵道は、鐵橋が出来上つてやがて開  
通した。町にも大きな寺の裏山を開いて停車場が出来ること  
になる。運送業が出来、製粉會社が出来、今度は更  
に大規模のモスリン會社が城址に建てられると言ふ。つい  
ぞ見たことのない活気が古い町の隅から隅へと行き渡つた。  
小照は其時「汽車は開通してから大變賑かになりましたよ。  
今ちや藝者が三十人以上も居りますからねえ」と言つた。  
二人は小照の他に藝者が三人しか居なかつた時のことを想

像した。風の吹荒れるのを聞きながらさびしく歎んだ時の  
ことを思ひ出された。小照は今年は何うしても東京に歸る  
と言つて居た。

「もう、此處で御目にかゝることは御座いますまいねえ、  
御機嫌よう」小照は停車場まで送つて來て言つた。

都の近郊と遠い山の中との間には、絶えず手紙が往復された。女は細い綺麗な字で二枚も三枚も書いてよこした。感情の著しく昂ぶつてゐる時もあるれば、思切つて沈んだ調子の時もあった。徒らに過ぎ去つて行く歲月——それに対して、女は殊に堪へ難い深い煩悶を見せた。

「私だつてもう來年は廿二になるんですもの、そんな無謀な智慧の無いことは致しません。」かう書いてあるかと思ふと、また時には、「何う願つても、父は許して呉れません。」

私は意味もなく目的もなくかうして山の中に暮して居ました。生きて居る甲斐が御座いませぬ。先生、私はもう覺悟を致しました」かう書いてあることもあつた。

また次のやうな手紙も來た。

「母はそれでもいろいろと心配して呉れますの、私が夜も晝も奥の二疊に引籠つて、いつも蒼い顔をして居りますと、何も申しませんけれど、何彼と慰めたり何かして呉れますの。此間も天氣の好い暖い日が御座いましたか、お重箱の海苔巻などを拵へて呉れまして、家にはかり引込んで居てはいけないと申して、先生も御存じのあの山際の別荘に母と一緒に参りました。冬にもこんな暖かい好い日があるかと思はれるやうな日でした。……先生、母の心を考へますと、私は涙がこぼれて仕方が御座いませぬ。折角決心した覺悟

も母の顔を見ると鈍つて了ひます」

それに對して、清は慰めたりなだめたり叱つたりした。貴女の決心さへ固ければ——自分下自分の身に十分の責任が成し得らるれば、如何やうにも父母を説得して、再び出京の出来るやうにして上げると書いて遣つた。さうかと言つて、清も女が出京してからのことを考へぬでもなかつた。出京すれば、自分の宅に置かなければならぬ。自分が再び保護者たり監督者たるの地位に立たなければならぬ。男が以前のやうに自分の宅に入居することは斷絶するにしても、何物の束縛をも成さない戀の力を拒ぐことは出来ない。それに、其他にもいろいろな問題がまだ解けずに残つて居る。しかしこれは女の境遇をも思ひ遣らすには居られなかつた。

「最早二年の年月も経過致し候ことゆゑそのやうなる御心配も無之ことと存候——小生も今度は十分なる責任を以て、監督者の地位に立ち可申候。」

かういふ文句の入つた手紙が清の手から父親の許に行つた。

ある時はまた、「折角小生を頼りて文學の道に志せし敏子を此まゝ田舎に埋らせ候ふは、如何にも残念に存候、今一度十分なる勉強あらんことを希望仕候。始めは年齢も若く、そのやうなる自覺的思慮もこれなかりしことゝ存候。二年間の田舎の生活は敏子に少なからぬ影響を與へ候ことゝ存候。御心配のほどは十分に御察し申上げ候へども、今一度御考慮のほど幾重にも願上候」などと書いて遣つたこともある。

冬から春までの間に、少くともさうした手紙の五通や六通を清は出した。始めは疎い形式的の文句が多かつたが、後にはそれが段々細かい處に入つて行つた。それは御尤に存候へども、親と子との間の關係なども御考へなされ度候。親は子等の精神までも束縛すべきものに候や否や——」こんな文句も入るやうになつた。

父親の手紙、母親の手紙、敏子の手紙——それがいろいろに清の心を動揺させた。「それほどまでに言ふのならば、今一度出京させて見やう」父母の間には、かう相談が續つたらしくも見えた。「しかし出京させるに就いても、今度は信用して貴方ばかり任せでは置かれぬい」かう邪推されるやうな處もあつた。

丁度其時兄に當る人が、京都から東京に轉任して、二月には、新しく貰つた細君を伴つて出京するといふことを敏子は報じて來た。それには屹度父が行くから、是非其時には、一緒に連れて行つて貰ふ積りである。近い内に御目に懸れるのを喜んで居る。かう書いてある。

「兄さんが東京に家を持つやうになつたさうだ。さうなれば、非常に都合が好い。お嫁さんの居る中に敏子が居ることとは出来ないにしても、何かにつけて都合が好いからねえ」かう清は細君に言つた。

しかしその状態も幾度となく變つた。父母は敏子の出京を許したやうにも見えた。女から來る手紙もある時は樂觀し、ある時は悲觀した。

「何うせ出京することは出来さうにもありません。先生、

私は山の中に埋れて了ひます』かう書いてよこしたこともあつた。

春が来て、梅が咲いた。裏の林には青い草が芽を出して、蓬だの、嫁菜だの、なづ菜などが萌え始めた。二月は三月となり、三月もやがて盡きる様になつた。しかし矢張りつかりとした音信はなかつた。

久しく間を隔いて、もう何うしても父親が出京した時分と思ふ頃、突然敏子から手紙が来た。それは絶望的な手紙であつた。それにはかう書いてある。『……先生、父は今月の上旬に兄の嫁になる里方に參つて居りましたが、其處からすぐに發つて了つた様子で御座います。私が二年間思ひ詰めたことももう水の泡になつて了まひした。先生、もう先生には何時御目にかゝれるか知れませんが、唯々先生の御

機嫌よく御榮えなさるるを祈るばかりです。これを讀んだ清の胸は震へた。

清は自分の信用されぬのを殊に心外に思つた。其夜は清は遅くまで机に向つて、敏子の母親に宛てた手紙を書いた。『父君も母君も大に考へて然るべきだと思ふ。箇人の行く道は箇人より外に干渉する権利がない。父母は自己の子女の爲めに肉體上の保護は絶対にしななければならぬが、精神までを自由にすることは出来ない。私は信ずる。』  
激昂した筆はいつものやうな形式的の敬語を並べる餘裕はなかつた。

『世の中では、いろいろなことを申したでせう。私の製作から起つたいろいろ御心配になるやうなことが御耳にも入つたでせう。然し私は信用して戴き度い……私は父君のや

うな基督教信者ではない、けれど克己とか犠牲とかに就ては人後には落ちない積りです。」

こんな文句も中にはあつた。

「父君は御上京なされし御様子、實は私は眞面目に御目にかつて、不幸福な敏子の爲めに、いかやうな御相談をも受けたいと考へて居りました。先年私が此問題に關係した時、それなら貴方に娘を上げる。自由に勝手に何うにでもせよと父君は仰られた。私は今度は御不都合ならば、さうしてなりと——私の家の籍に入れてなりと、敏子を田舎の希望のない中から救ひたいと思つて居ました。」

かうも書いた。

「敏子を將來幸福にすることは私には難かしいかも知れま

せん。けれど敏子が實際、心から文藝の道に立たうといふ決心なら、いかやうにしても世の中に出して遣りたいと私は思つて居ました。私は敏子を世に出すに就ては全力を擧げる積りでした。實際問題は知りません。馬橋との關係などは何うすることも出来ぬかも知れません。けれど文藝の上には於ては出来得るだけ敏子の爲に計りたいとは今でも思つて居ます。ですのに、父君母君は世間の下らぬ誤解を信用して、私を信用して下さらなかつた。これは心外でした。」

最後にかう書いた。

「改めて申上度い。敏子が文藝の道から離れて、普通の女子として、人の妻として、それで安んじて行けるなら、それに越したことはない。私は心からそれを喜ぶ。しかし實際文藝の爲めに一生を犠牲にしたいといふ堅い決心でした」



教へて居る生徒だつて言ふぢやないか。そいつは面白いねえ。今度出て来て、もつと好い男に其女が乗り換へて見るやうだと猶面白い」こんなことを言つて笑つた。

天気も晴れた日が少なかつた。冴え返つて寒い風が吹いたり、雪が萎びた梅の花の梢に重く降り積つたりした。電車の停留場まで出る近郊の路は、靴では歩けぬほど泥濘が深かつた。

ある夕暮、薦包の荷物を載せた荷車が清の門前に来て留つた。車力が門のくいを明けて入つて来て、「服部さん、荷物が参りました」と言つた。其時、清は門の傍の鞆の處を逍遙して居た。遅い梅の花が白く薄暮の空に浮き出すやうに見えた。やがて門を明けて引込んだ荷車の齒は重く立開先は小砂利は緩つて聞えた。荷物の数は七箇、それは

敏子の山の中から来たのであつた。



荷物が着いてからも、消息は久しく解らなかつた。敏子からの手紙もばつたりと来なくなる。「何に、そんなに心配することは無いんですよ。もうすぐ逢はれるからと思つてそれでよこさないですよ。」細君はかう言つて夫の顔を見て笑つた。

その細君も後には「何うしたんでせうねえ」と不思議にした。それほど長く消息がなかつた。父親が上京したのかしないのかそれすらはつきりとは解らなかつた。長い間、

菰包の大きな荷物は、縄で絡げたまゝ、暗い玄關の二疊に積まれてあつた。(何の用か)

ある日曜日、西といふ友人が遊びに遣つて来た。この人は田舎寺にかくれた山崎だの、肺病で今茅ヶ崎の病院に入つて居る田邊だのと、昔一緒に往來した夥伴で、清夫妻に取つては殊に親しい間柄であつた。細君は殊に力にして居た。

「何うしたんだえ？ 此荷物は？」

案内も乞はずにつか／＼と入つて来てかれはかう訊ねた。

「遂々遣つて来るのかえ。よせば好いのに……男は東京に居るんだらう？」

かう續いて言つて、懐から読みかけて来た洋書を出して坐つた。

細君に向つては、

「また宅に置くんですか」

「まださまたつた譯ではないんですけれどもねえ」

「先生の兄が今度東京に轉任して来て家を持つからねえ…  
今度は僕が監督するといふ譯でもないんだ」

清は傍からかう言つた。

「何うも新時代の女も好いけれど…此頃のは随分閉口するのが少くないからねえ。ノラやヘダのやうなのならそれや好いけれど、附焼及ちや仕方がない」こんなことを言つて、「餘り新思想を鼓吹した君達にも責任がある」

清は黙つて笑つて居た。

「お蔭で片輪者や、一生不幸福に世を渡る女などはかり出来て仕方がない。今の女子大學あたりの良妻賢母も御免だ

が、新時代の犠牲になつた女も厭だねえ」

「犠牲の出来るのは仕方がないさ」

「何れも困つたものさ…日本の女の特色が段々なくなつて来る」

「その代り、女が大分鮮かな生々とした色を出して来たかやないか」

「餘り鮮かでもあるまい…」

西はかう言つて言葉を切つて了つた。

續いていろいろな話が出た。自然主義の話も出れば、西洋の新しい脚本の話も出た。西の話には何處かかう上品なやさしい處があつた。それに、社會本位といふやうな處もあつた。清はさうした友の思想を前からよく知つて居た。「時に田邊は何うしたらう。近頃見舞に行つたかえ？」

西はかう訊いた。

「暫く行かないがねえ、餘りよくないさうだ」

「さうだらうねえ、かう寒くつては——」と言つて、「氣の毒だなア。僕も見舞に行つてやらうと思ふけれど、先生の顔を見ると、いろいろなことを考へなければならぬからねえ。今度行つたら、よろしく言つて置いて呉れたまへ」  
清は軽く點頭いて見せた。

七

忙しい間に暇を拵へて、清は病んだ友を度々相模の海岸に見舞つた。田邊の容體はもう大分悪かつた。醫師からも見離されるやうな状態にあつた。

此友のことも考へれば胸が塞がるやうなことが澤山あつた。十五六年も心をびつたりと合せて来ただけに、一層同情の念が湧き返つた。白楊で圍まれた小學校や、松林の處處にある別墅や、鱒の開いたのが一面に日に干してある漁師の家や、さういふものゝ目に留る海岸の道を、かれはい

ろいろなことを頭に浮べながら通つた。ラックといふことが染々と思はれるやうな年齢にかれはもう達して居た。電信柱に病院の名が白く書いてあつたり、幾筋にも別れる道の角に建築しかけた二階屋があつたり、深い緑の葉の中に真赤な乙女椿が咲いて居たりした。停車場から病院まで十五六町は何うしてもあつた。だらだらと低く折れ曲つた阪路を下りると、病院の海氣室が砂丘の上に白く見えて、其向ふにひろい相模灘が開けた。

その相模灘は、田邊の居る病室の廊下からも見えた。病室は南の盡頭になつて居て、長い廊下を通つて来て、其の扉を静かに明けると、瘦せこけた病人の青い顔が先づ第一に眼に映つた。「服部君——」かう言つて、田邊はいつも隠しさうに身體を掻げた。

寢臺の下に三疊ほど疊の敷かれる處があつた。其處には新聞や雑誌や菓物を入れた籠などが置いてあつた。氣分の好い時は、田邊は寢臺から下りて、其疊の處で機嫌よく話した。「また、後で咳が出て御困りになりますよ」お榮さんといふ二十六七の女が心配してかう言つても、容易に言ふことを聞かなかつた。お榮さんは、背の高い、すらりとした、顔になつかしい表情のある女であつた。細君に比べると、何處かかう若々しい艶なところもあつた。窓の細かい金網に砂がばらばらと當るほど烈しい寒い風が幾日か續いて吹いた。單調な浪の音、色彩の無い砂山の道、春になつても春は容易に來さうにもなかつた。「花でも咲くやうになつたら——」かう言つて、病人は暖かい日影に漬れた。

君には此頃に珍らしいやうな好い暖い日もあつた。「藤村君は来て呉れたし、天気は好いから、お榮さん、島波其處まで出て見ても好いだらう」かう笑つて言つて、廊下の出口の石段を下りて、南の日向のベンチに腰を掛けた。「海は矢張り好いねえ」

かう言つて、キラキラ光る遠海の日の光を眩しさうにして見た。

其年は餘寒がいつまでも續いた。櫻の花が咲くやうになつてからも、雪が度々降つた。ある日曜日に清が東京から遣つて来ると、危ないと思つた空が、平沼あたりから大雪になつて、ボタボタした雪片が一間先も見えぬ位に降つた。藤澤を通る頃には、海の遠處が遠雷のやうに聞えて、灰色の雲が物凄く地平線の上に垂れた。清は停車場に一晝

しかない車を雇つて、白楊や竹藪に重く降積つた雪道を辛うじて病院へと志して行つた。

神戸東京間の急行列車は、清の車が病院の見える阪の上に行つた時、轟と音を立て、後の方を通つて行つた。敏子は其列車に乗つて居た。

初めて病院を見舞つた時の夜のことが今でもはつきりと清の頭に残つて居た。其時お榮さんは長い廊下を送つて来て呉れた。廊下にはぼんやりした洋燈が處々に點いて居て、看護婦の白い服が時々病室から静かに出て行つた。田邊は何うしても今夜は泊つて行けといふ。「二十町ほど行けば、君達を泊めても差かしくない海水旅館があるけれど、其處まで行くのは大變だ。今夜は僕の爲めに辛抱すると思つて、其處の近くの旅館屋に泊つて行つて呉れ給へ……それとも

僕の家泊つて呉れるか」清はかうした病人の希望を容れぬ譯には行かなかつた。

○『もう解りますから』

長い廊下を送つて来るお榮さんに清は幾度となく振り返つて言つた。お榮さんのすらりとした姿はしんとした廊下に浮き出すやうに見えた。何となく胸の痛くなるやうな夜で、病院の周圍にある松の音が冴えて聞える。

入口の扉を明けて戸外に出ると、暈を被た薄月がぼんやりと地上を照して、玄関前の砂利の上には、低い松の影が微かに映つて居た。断つても断つても、お榮さんは送つて来て呉れた。草履の砂利に鳴る音がチャラチャラと後から跟いて来た。

旅館屋は低い松林の中にあつた。裏に廻ると、雨戸が一



清は遅くまで眠られずに居た。海岸の松林の中の病院、廊下から海の見える病室、其處にお榮さんと細君とに看護されて居る友のことが染々と思ひ出された。夜もすがら松の音がした。

その旅籠屋から麥畑を越した處に、田邊の家族は別荘を借りて住んで居た。六疊に八疊に二疊、其處から松林を隔て、相模灘の波の音が聞えた。

細君とお榮さんとは、更代に看病に出懸けた。留守に残つたものは、何かめづらしいものが出来たと聞つては、松原を越して、病院の裏門から近道をして持つて行つた。子供等も母親やお榮さんの後に跟いて、日に毎度となく父親の病室に行つた。

一番幼ない末の女の兒が一人取残されて、其の松原の中の路で泣きながら歩いて来ることもあつた。

病人は常に都を戀しがつた。昨年まで新橋近くに住んで居て、天ぶらは橋善、鰻は竹葉、菓子には壺屋と贅澤な生活をして居た身には、病院の食物は拙くツて食へなかつた。見舞に来る人々は、それを知つて居て、珍らしい菓物の、菓子だの、牛肉だのを見舞に持つて来た。竹葉の鰻の蒲焼を小包で送つて来る人などもあつた。

「東京には是非一度歸り度い。死ぬともう運命が決つて居ても、一度は治つて、新橋の停車場から下りて見たい。」

病人はいつもこんなことを言つた。

見舞に来る人は多かつた。文學者が来たり、新聞記者が来たり、雑誌記者が来たり、書家が来たり、書肆の店員が



来たりした。かれの作品を愛讀する青年はわざわざ遠くから遣つて来た。

日曜日には、其二疊が一杯になることなどもあつた。

段々暖くなつて来た。裏門へ通ふ路には葦や蒲公英が咲いて、前の麥島からは雲雀が元氣の好い聲を立て、高く空にあがつて行つた。清も見舞に行つた次手に一人で病院の構内を歩いて見ることなどもある。海氣室の小高い處からは、ひろびろとして海が繪のやうに開けて見えた。

蒼い瘦せた顔をした若い底髪の女が、海氣室のベンチに腰を掛けて、茫然として海を見て居た。障の上には小形のパイプが開かれてあつた。

ある時細君と一緒に歩いて居ると、細君はふとある建物を指して、

「あれが死亡室ですよ」

かう清に言つた。

清は細君の顔を見た。細君も清の顔を見かへした。

子供等は賑かな東京からかうした田舎に来たので、一緒に遊ぶ友達とともなかつた。お榮さんが抱へて呉れた松林の中の鞆に乗つたり下りたりして、長い春の日を暮らして居た。其向ふの麥島と松林との間には、停車場から病院に通ふ路が通じて居て、見舞に来る車がをり／＼通つた。清と青年畫家と二人並んで其家を通ると、子供等が其の鞆に無邪氣に遊んで居るさまが明らかに松の間を透して見えた。

「龍男さん」

青年畫家は遠くから呼んで見たりした。

田邊の作品は一二年以來世に認められて来た。それだけ世ではかれの不治の病に罹つたのを惜んだ。海岸に来てからも、何ぞと謂つては、新聞はかれの病状を報じた。中には寫眞を挿れて一段半もその消息を掲げたものもあつた。病院から海水旅館のある處まではかなり遠かつた。見舞に來た人達の中には、次手に其處に行つて午飯を食つて行くものもあつた。その人達は多くは近道をして、波打際を真直に突切つて行つた。其處には砂山があつたり、網を干した漁師の家があつたり、船が岸に引上げられてあつたりした。海中にある島嶼子岩には白く波が碎けた。客がまだ少いので、海水旅館の戸は半ば閉め切られてあつた。客を待たせて置いて女中は雨戸を開けたりなどした。

帳場のある處から、暗い長い廊下を通つて退つて來ると、間の踏板が外されて渡れなくなつて居る。背の高い青年書家がそれにも躊躇せずにくん／＼飛んで渡つて行くと、後から來た背の低い小説家は、「コンバスの長いものは違つたものだ」と笑つて立つて居た。

三人の群の中には清も居た。

「ヤアこれは飲める」女中が茶湯壺の上に鯛の刺身と鱈の酢の物を運んで來た時、小説家は盃を拵にさしながら言つた。日の暮れる時分には、三人はもう大分酔つて居た。

「中年の戀……僕なども大に中年の戀といふことを感ぜたい。今度書いた僕の作を一つ君に是非見て貰ひたい……僕のは、君のやうに事實ぢやない。何うせ想像だから、詰らんけれど、中年の戀といふことはそれでも感ぜて書いた

んですよ。……戀なんて、僕は何うも眞面目に考へられん」と眞面目のやうに冷かすやうに言つて、「服部君なんぞだつて、こんな大きな體をして、今更ラヴでもないぢやないか、廂髪を相手にしやうつて言ふんだからねえ、これで、君！」かう言つて青年畫家の方を向いた。

「あは、」と青年畫家は大きく笑つて。

「だつて、君だつて廂髪煮ぢやないか」

「それはさうさ、僕はまだこれで服部君よりは若いやねえ」

三人は聲を合せて笑つた。

「だつて……服部君だつて」と小説家は暫くしてから、「此頃は違ふんでせう。大分、僕も聞き込んだことがあるよ。田邊君がまだ丈夫な頃、あの二階から一緒に出舞けたことがあるが、あの時などは精いからねえ。大に仙人ぶつたり

何かして……」

「さういふ譯でもないさ」

かう言つた清もかなり酔つて居た。

青年畫家のスケッチブックにはいろいろなものゝ寫生してあつた。病床の上の田邊の顔、看護婦の横顔、お菜さんの笑顔、それから今日三人して其處で坐つて話した時のさまも描いてあつた。病院から此處に来る途中で寫生した船やら漁師の顔やら烏帽子岩などもあつた。

小説家はそれを手に取つて、いろいろな批評をしながら見て居たが、「おい、君、二三枚何か書いて呉れ、此處から二三軒出してやらう」かう言つて、女中にはがきを五六枚持つて來させた。

やれやれ

漫画の上手なので世に聞えた青年畫家は、大きな手や足を  
をした男だの、わざと誇張した漁師の顔だの、松原の上に  
白帆の見える處などを描いた。三人して酒を飲んで居る處  
は殊によく出来た。

「これは好い、服部君などはそつくりだ」と小説家はそれ  
を手に取つて、「これを一つ病院に遣らう。」

「君もよく似てるよ」  
清は傍から見て言つた。

病院に遣るのには「此の清寒に君の無きを憐む」と書い  
た。ある雑誌記者にはわざと氣取つた文句を並べた。青年  
畫家がそれからそれへと達者に筆を揮ふのを片端から取つ  
て、二人はいろいろ宛名を奮くのに餘念がなかつた。  
○ 清の書いた宛名の中には、西だの山崎だのがあつた。小

説家はそれを見て居たが、「山崎君、さうく、僕もそれに  
署名させて貰はう」かう言つて、名を書いて、「山崎君にも  
久しく逢はんねえ、何うしたねえ。先生？」  
かう思ひ出したやうに訊いた。

「なまじつか文壇などに出てまごまごして居るより、お経  
でも読んで居る方が餘程氣が利いて居るねえ」  
かうも言つた。

一枚傍に伏せてある端書は、敏子に宛て、書いてあつた。  
小説家はそれをそつと取つて、  
「見給へ、服部君はこれだから」

と青年畫家に見せた。

青年畫家は笑つて見せた。清は別にそれを取返さうとも  
しなかつた。矢張笑つて居た。

見ると何にか芳村の。後

「服部君は若いねえ——まあ一つ上げませう」小説家は笑ひながら盃をさして、  
「僕も一つこのはがきに書かして戴きませう。好いでせう、服部君。」

かう言つて、其處に俳句を書いた。

中年の戀といふことがまた繰返された。病院に居るお榮さんの話も出れば、女に對する心地が段々變つて行くといふ話も出た。男は幾人でも一緒に戀をすることが出来る。かういふ話もした。

「こんな話をするよ。昔は服部君は眞赤になつて怒つたものだがな？」

昔を知つて居る小説家はこんなことを言つた。

翌日、三人の姿は再び病室の狭い二疊に見られた。昨夜

は大分苦しんだが、今日は餘程好いなどと病人は言つて居た。はがきが今少し前着いたと言ふことから、昨夜彼方此方にはがきを出した話、敏子に出した端書に小説家が俳句を書いた話、中年の戀の話、それからそれへと話のはづんだ。お榮さんも笑はずには居られぬやうな話も出た。

病人はふと思出したやうに、

「さう言へば、めづらしい話があるよ。服部君の遊ぶ所をちやんと報告して行つた人がある」かう快活に、しかし清の顔に其眞偽を判じやうとするやうな眼色をして、「けれど何うも、服部君が遊ぶにしては、其の場所が非常に不便な所なんだがねえ……。電車の都合も悪いし——」かう言つて、咳嗽を軽く二つ三つして、「しかし報告した人にも借用の出来る點があるがねえ」

小説家も青年畫家も笑つて清の顔を見た。清は別にそれを打消さうともしなかつた。

九

遅くなつたからもう出懸けやうとして居た。ふと門の明く音がした。

『客かしらん』

かう思つて清は耳を敲てた。しかし玄關前の小砂利の音もしなかつた。立上つて、縁側から玄關に出る扉をあけて見た。

遅い花の交つた新緑が午前の日影を受けて繪のやうに見えるて居た。

誰も居なかつた。

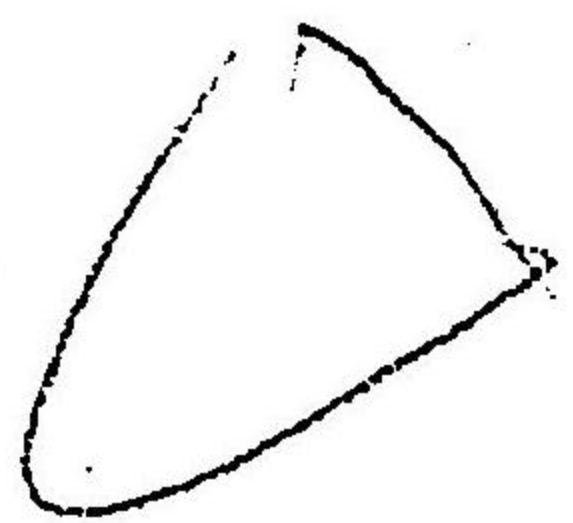
ふと振り返つたかれは、思はずはつとした。門からぐるりと廻つた茶の間の前の庭には、敷石づたひに小さい扉があつた。今朝婢が掃除した時に明けたまゝにして置いた。其處から董色の袴を穿いた敏子が色の白い顔を出した。二年逢はずに居た先生と弟子とは相對して立つた。日を受けた新縁はチラチラした。

「先生！」

久し振でそのなつかしさうな聲を清は聞いた。清の眼には少しく靨くなつた顔と例の生々した表情に富んだ眼とが映つた。

「まア、敏子さん」

「まア、奥さん」



かうした會話がやがて女同志の間に取交された。脱いで上つた敏子の草履には赤い派手な緒がすげられてあつた。

今まで静かであつた一間は俄かに鮮かな色を着けて来た。メリンス友禪の座蒲團は持つて來られる。久し振の挨拶は繰返される。出懸ける支度を其方除にして清は其處に來て坐る。何から話して好いか三人が三人とも解らなかつた。

「今も話して居たんですよ。敏子さん、皷皮來たに相違ないが何うしたんだらうッて。あの体のことがあるか。もう宅には來ない積りなのかも知れないなんて言つて居たんですよ」

細君はこんなことを言つた。

敏子は、

「もう、餘程前に來たには來たんですけれど、今日こそ上

らう今日こそ上らうと思つて居たものですから、お手紙も上げなかつたんですの、……奥さん、そりや此方に来てから忙しかつたのよ。此方に来る翌日から貸家を探して歩いたんですもの」

「それで、兄さんのお宅はきまつて？」

「え、やうやく……」

「何方？」

「小石川なの」

「ぢや、當分あららに入らつしやるのねえ」

「いゝえ」と敏子は清の顔を見て、「私は一日も早くこちらに御世話になりを上りたいんですけれど、親がまだ別れないもんですから。奥さん、そりや、面白いのよ。お嬢さんて言ふものは面白いものねえ」

清も傍から時々口を挿れた。段々心が落着いて来た。いろくに思つて居た疑惑もいくらか解けたやうな心持にもなつた。作品が惹き起した心の状態には、清も敏子も成たけ觸らぬやうにして居るやうに見えた。

細君が時々それを言ひ出さうとすると敏子は、「奥さんあのことはもう言はないのよ」と言ふやうな眼色をして見せた。

次の間に寝かしてあつた赤兒が不意に啼き出した。細君が急いで立つて抱いて來るのを敏子は見て居たが、「まあ、奥さん、お目出度いことがあつたの？知らせて下さらないんですもの、ちつとも知りませんでしたよ。何時御誕生でしたの？」



「この二月に生れたんですけれどもねえ……もう赤ん坊な  
んかめづらしくありませんものねえ、敏子さん」  
かう言つて細君は笑つて見せた。

「まア、可愛いこと、あんな大きな眼を明いて……坊ちや  
ん？」

「女さ」

と清は傍から突如に口を挿んだ。

「敏子さんの出て入らつしやる時には、乾度かういふもの  
が生れて居てね、不思議のやうねえ」細君は敏子が先年初  
めて清の家に来た時、このすぐ上の男の兄の産褥に居たこ  
とを思ひ出した。

「さうねえ」

敏子の眼には例の表情が著るしく透はれて見えた。三人

は暫し黙つた。「妻がもし死んだら？、自由の道が開いたら  
？」作品の中にかう清が書いた。その言葉がこの場合誰の  
頭にも上らぬ譯には行かなかつた。三人はさまざまの心を  
抱いて、黙つてこの沈黙を見守つた。

子供ばかり殖えて行くことが、清の胸に一種の哀愁を誘  
ひ起した。

近所で新築して居る鉤や手斧の音が午前の静かな晴れた  
空に高く聞えた。

「それでもよく宅が解りましたねえ」

清は沈黙を破るために、かうしたことを言つて見た。

「え」

かう言つた敏子も急にはその沈黙の中から出られないや  
うに見えた。しかしそれも長い間ではなかつた。だつて、

お手紙でよく解つて居ましたもの……かう言ひ懸けた時には、もう常の状態に復して居た。「私、いつか手紙に想像して圖を書いて寄したでせう。丁度其の通りでしたでせう……」

「え、え、さうでしたねえ」と細君も思ひ出して笑つて、「何うしてこんなによく知つてるんだらうツて、其時と言つたんですよ」

「だって私、此處等はよく散歩したんですよ……」敏子はかう言つて笑つて、「だから、今日も始めて来る宅とは何うしても思はれませんの。何だかかうもう幾度もく来たことがあるやうな気がして仕方がありませんの……でも變つたことは變りましたのねえ」

「それは變つたとも……丸で屋敷町になつて了つた」

かういふ清の後に跟いて細君も言つた。

「それやもうねえ、敏子さん、私達が此處に引越して来た時分から見ても、すつかり變つて了ひましたよ。越じて来た時分には、前も後も皆な畑で、夜などそりやさびしかつたんですよ」

「でも、先生には元のさびしい時分の方がよかつたでせう？」

「それはさうだねえ」

敏子は遠い山の中で想像したこの近郊の家を見るべく立上つた。「何うもひどい家よ」かう言つて細君も赤兒を抱いたまゝ跟いて来た。座敷には見馴れた海岸の松の油畫だの、高田の諏訪の森を描いた水彩畫だのが懸けてあつた。北向の書齋の机の周圍には、例の如く書籍やら雑誌やらが一杯

に散ばつて居る。敏子の置いて行つた前硝子の書箱もあつた。

庭には椿だの、松だの、檜だのが栽ゑてあつた。其處にある木犀や躑躅は、牛込の兄の家から持つて来たといふことを細君は話した。

「さう言へばねえ、あちらのお兄さんもねえ。お亡くなんなすつたツてねえ。」

「あちらの奥さん、矢張彼處に居らつしやるの？」

茶の間に戻つてから、敏子はかう訊ねた。清と細君とは、亡くなつた兄のことやら、遺族のことやら、嫂のことやらを話した。「残念なことをしたのさ……兄などは我々兄弟や一家の爲めに犠牲に生れて来たやうなものだからねえ」清

はかう言つて、續けて来た話を結んだ。

「本當に好い方でしたのにねえ」

敏子は染々と言つた。

「段々死んで行つて了ふ。もう僕の一家では、僕が一番目上になつて了ひましたからねえ……。兄が居る中は、何だと言つては、相談をして寄りかゝつて居たものだけねえ、もう寄かゝる人もなくなつて了つた。」

「本當ねえ」

「田邊ももう長いことはないよ」

「さうですツてねえ。私、来る時、茅ヶ崎の處で思ひ出しましたの……もう本當にお治りにならんでせうか」

「もう難かしい……。あれで一度でも好いから、少し快い方に向くと好いけれど何うもむづかしい」

「お氣の毒ねえ」

「後が大變ですわねえ！」と細君は傍から言った。

清は此頃自分の心の状態ををり／＼考へて見るごとがある。今までは唯前に前にとばかり進んで居たが、此の頃では狗となく周囲が顧りみられた。今まで超えて来た谷々が明かに兎渡されるといふやうな位置にあるやうな氣がして来た。

「死ぬといふことに就いても、もう以前のやうな同情は起らなくなつた。悲しいと思ふ念よりも、其人の居なくなつたといふ損失から起る悲痛、さういふことを感ずるやうにならまされたよ。實際から起る悲痛、それに越す悲痛はない」かう言つた清の感情はやゝ激して来た。「あなたも今度は一ツ眞面目に勉強して下さいさもなくつては困りますよ。ラヴも

好い。眞面目なラヴは僕も賛成だ。しかし巴渦の中に入つて、すぐ盲目になつて了ふやうでは仕方がない。さういふことは貴方も少しは解つたでせうねえ。一つ大に勉強して貰はなくつちや——」

「本當ねえ、これから、敏子さんも勉強なさらなくつちやねえ。山の中に二年も苦しんで居たんですから」かう細君が言つた。

「本當よ」

敏子は微かに點頭いて見せた。

清は一步を進めたかつた。其一步先に觸れたかつた。其處には暗黒なある物が潜んで居た。「其男は？」「其のラヴは？」「東京に来てからもう逢つたか？」疑問が彼方此方から起つた。

敏子もそれを感じたらしく見えた。清の方を見た眼は著しく光つた。敏子は低頭き勝ちにして居た。しかしこの疑問には、何方からも觸れることは出来なかつた。その疑問を背景にして、二人は他のことを語つた。其間に赤兒をそつと寝かして来た細君は、茶を淹れかへたり、菓子を勧めたり、煮え立つ鐵瓶に水を注したりした。婢につれられて町に買物に行つた五歳になる男の兒も歸つて来た。敏子は、「まア、勉さんこんなに大きくなつて。」かう言つて、それを膝の上に抱いて見たりした。時計は十一時を打つた。

細君が勝手に行つて、午飯の支度に懸つて居ると、何か落付かぬやうにして居た敏子は、

「もう、お午なの……。私、又來ますわ」  
 「まア、好いでせう、午飯の支度をして居るから」  
 細君も出て来て、「まア、好いちやありませんか、何にもありやしませんけれど、久し振ですからさ。……何か、用がお有んなさるの」かう言つて敏子の顔を見た。  
 敏子は振切つて歸りもしなかつた。茶湯臺の上に野菜の煮たのなどが並ぶ頃まで居た。「他の方ぢやないから、お膳を出さずにこれで御免を蒙りますよ」などと細君は心易立を言つた。清も何うせ遅くなつたのだから、午飯を済してから出懸けやうといふ積で居た。二年前に、牛込の山手の一間で、かうして一緒に食事をしたことが誰にも思ひ出された。其頃から見ると、敏子は女といふ特色を一層鮮かにした。想像とは違つて、頬だの、手だの、膝だの、何處に

Y  
E  
H  
S  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

も張り切つたやうな處があつた。眼の邊にも深い影が生じた。

軽い笑聲や押へるやうな囁きが其の周囲に起つた。清はビールがあつたのを一本抜かせて、明るいコップに泡の立つのを旨さうにして飲んだ。敏子はつゝましやかに音を立てぬ様にして食事をして居たが、箸を持つ指は何だか物を落しさうにあふなげに見えた。

「久し振で、敏子さんの箸の持ち方を見ましたねえ」  
こんなことを言つた清は、いかにも心持好さうに見えた。

最後の一碗を半ほど残して敏子は細君の方を見た。最後の一碗に茶をかけて食ふのが敏子の習慣になつて居た。  
「あゝさうでしたねえ、お茶でしたねえ」かう言つて、細

君は笑ひながら、土瓶を取つて渡した。

食事が済むと、清はすぐ出廻ける支度をした。洋服を着ながら、

「荷物は書齋の押入れの中に藏つて置いたから、今日解いて、入用のものは持つて行つたら何うです」

「いゝえ、もうぢき來ますから、其時まで預つて置いて戴きますわ……。私は、早く來たいと思つて居りますのですけど、いろんな用があつたのですもの、かう言つて少し送切れて、『でも、もう好いのよ。大抵片附きましたから、』  
「今度は大に勉強するさ！」

と敏子は笑つて見せた。  
細君と一緒に玄関まで敏子も送つて出て來た。「ぢや緩く

り話してお出なさい。私の歸るまで遊んで居ても好んでせう。かう言つて清は出て行つた。

初夏の鮮かな心持のするやうな日であつた。ある家の鞆の傍には、暎咲の躑躅が真赤な燃えるやうな色を見せて居た。空は碧く晴れて、細い垣根道には、扇骨木の嫩葉が日影に光つた。清は料草の庭の周囲を縁取つた櫻の新緑の傍を通つて、向ふの臺地にチラチラする西洋づくりの家や、硝子窓や、二階屋の新しい欄干などを目にしながら、汽笛や電車の音のする方へと急いだ。

つり子

十

新建の長屋の裏やら丘に凭つた青いペンキ塗の洋館やらかたまつた樺の森やら、さういふものゝ見渡されるやうな處を電車は駛つた。爺が白い旗を出して居る踏切があつたり、葉櫻の交つてゐる疎らな林があつたり、牛の糞ころんで居る牧場があつたりした。新緑が到る處に鮮やかな色を展開げた。

郊外から都に行く電車の中―それは清に取つて毎日の生活の意味ある一部分であつた。其處でかれはいろいろなこ

とを思ひ立つた。また其處でかれはさまざまのことを思ひ返した。知らぬ人と知らぬ人との間に腰を懸けて、ちつとして居る間にのみ、かれは自己の内面に深く立入つて考へることが出来るやうに思つた。

見覚えのある車掌の顔、それにも日毎の自己の生活が細く織り込まれてあるやうに思へた。夜遅く終列車の赤い光に照された眠むさうな顔や、黎明の鮮やかな空気の中に浮出すやうに見える生々とした顔や、思ひも思けない停車場から思ひもかけない時間にふいと邂逅した蒼いたやうな顔や――それが其度毎に起した細かい感情と神経とを、いつも歴々と蘇らせて見せた。

「不思議な處で此人に逢つた」  
かう其顔が言つた。

「今時分……こんなに遅く……」

かう其顔が不思議にした。  
平生廂髪に結つて、藍色の袴を着けてゐる女が、ある日高島田に銀簪を挿して、思ひもかけない停車場から乗つた。それが其女のライフの變化を清に思はせたことなどもあつた。乗つて来る人々、降りて行く人々、其處に生々とした複雑したライフがあつた。

「電車が出来てから、人間と人間との交渉が餘程親密になつたねえ。第一、向ひ合つてゐると、其人々の家族といふことまで考へられるからねえ。自分の周囲の人達では、さう離れて考へることは出来なけれど、電車の中で見る人達なら、草木を見る位に離れて見ることが出来る。好い木もあり、悪い木もある」

Handwritten notes in the bottom right corner of the page.



西さんはある時こんなことを言つた。またかうも言つた。  
「此間、飛驒の山の中を歩いて居たがねえ。……それは深い山の中で、人寰には五里も六里も離れて居るといふ處さ。其處で電車の中でいつも見知つて居る顔などを思ひ出すんだから面白いぢやないか」

ある停留場では、驛長が金縁に赤い色の線をつけた派手な正帽を冠つて居た。ある停留場では、若い助役が着いた驛の名を特色ある聲で高く觸れ廻つて居た。トンネルを出た處の赤い煉瓦に雨の脚の繁く降りかゝるさまが鳥渡眼に映つて見えると思ふと、今度はレールに添つた小さい家で、金網の鳥屋に鶏を飼つて居るさまが不思議にもはつきりと眼に浮んで見えたりした。電車はいつも其間を快く走つて行つた。

其日は電車は空いて居た。前に島田に結つた綺麗な女と、洋服を着た紳士と、印絆纏を着た職人風の男とが乗つて居た。日光を受けた雨側の新緑が車内の人々の顔や衣の上に動いた。

敏子と妻と三人して話した一間のさまがまたしてもかれの眼の前を浮んで通つた。

一人で居る時の心を清は常に離れて考へて見た。其處には暗い影があつたり、恐ろしい影が見えたり、不安の分子が著しく含まれてあつたりした。秘密にする程の必要のない秘密でも、成丈け人に知られたくないといふ心もあつた。「普通の人間は平気で生きて居る。何故自分ばかりかう不安なのだらう。何故かうイライラして居るのだらう」

時にはまた、

「一體、さうした暗い處に觸つて見るから悪いんだ。普通の人は、本能とか秘密とかいふものには成たけ觸らないやうに成たけソツとして置くやうにして居る。止むを得ず、それに接觸しなければならぬ時には、黙つてそれに従つて、其影の一刻も早く通過するのを待つて居る。さうでなければ、それを利用して平気でそれと同化して居る。だからそれに同化されない人間は、成べく避けて居るより他に仕方がない。一體、それに觸つて見るから悪いのだ」かうも考へて見た。しかし矢張平気にはなれなかつた。引緊めて置いた種を延ばすと、其處に自由なる境地は開けた。しかし「自由」の奥は深かつた。暗かつた。暗かつた。男と女とは絶えず恐ろしい對照を爲して居ることをかれ

は感せずには居られなかつた。かれは電車に乗りながら、いつもかうした問題を考へた。節操を唯一の寶とする普通の女と、節操を弊履の如く捨て、顧みない女と——本能の命ずるままに何の顧慮する處なく巴渦の中に入つて行く男と、本能の種を出來得る限り引緊めてそれを一意抑制して行く男と——其間に複雑した心理があり悲劇があり運命があつた。

不眞面目で起つても最終まで不眞面目では居られない。眞面目で始つても徹頭徹尾眞面目ばかりでは居られない。其處に矛盾と衝突があつた。

かれは秘密にして置かなければならぬことを、男の心で平氣に解釋して、秘密にしなかつた爲めに、ある女を失つたことを思ひ出した。其時、男と女との持つてゐる個

の別々なのを染々感じた。それから節操を一たび破つた女の男の爲めに終極まで玩弄され支配されるあはれさと、逃げで行く女の後から一生懸命に追懸けて行く男の意氣地なさとをも考へて見た。!!

「人間は年を取れば取るほど、段々性慾的になつて行くやうですわねえ」

平生そんなことを言ひさうもない友がつくづく感じたといふ風で、さう言つたことを思出した。

「人間は肉體を磨けば肉體が発達する。精神を磨けば精神が発達する。何でも磨いた處が発達するんだねえ」が言つたこともあつた。

一二年此方、清の胸は其方面にも開けて来た。年を取つても、女は矢張男の唯一の對照であるといふ風に考へられ

て来た。此頃時々清が出かけて逢ひに行く女も一人あつた。

書齋を明けて敏子に貸すことにした。處々に脚鞠の明るく咲いた芝草の庭を前にして、敏子は菰包を開いた。包の中からは書籍やら雑誌やらが出た。行李の中には、晴れの場所に用ゆる高價な帯や衣類なども入れられてあつた。「もう再びとは田舎に歸るまい」包を拵へる時、さう思つて、敏子は何も彼も入れて來た。大きな信玄袋の中には、男の手紙や清の手紙なども入つて居た。

硯だの、筆架だの、水入れたのを順序よく机の上に置いて、傍の前硝子の書籍には、紅葉全集や樗牛全集やツルゲネエフの全集などを綺麗に並べ立てた。清が社から歸つて、其處に顔を出した時には、もうあたりは綺麗に片附いて居た。

フランネルの單衣を着て、金茶色の帯を後に見せて、明るい窓に向つて坐つて敏子は頻りに手紙を書いて居た。

「夏になると、此室は少し暑いよ。何うも西日がさして……」清はかう言つて其處に立つた。

「それでも明るいから、住心地は餘り悪い方ではない」敏子が此方に向くの見ながら言葉をツイて、「此處なら、少しは落附いて勉強が出来るでせう？」

「え、え、え」

書き懸けた手紙を急いで丸めて、敏子は膝を此方に向け  
た。

清は机を座敷に移した。読み懸けた洋書や雑誌や原稿紙  
や手紙を入れた文古籠などを其處に持つて来た。述ひ棚の  
上には新たに買った洋書を並べて、下の小さい押入れには  
いろいろなものを入れた。硝子障子になつて居るので、庭  
の新緑が鮮かな色彩やら日光やらを室内に漲らした。清は  
其處で筆を執つたり書を読んだりした。敏子が書齋に居て、  
自分と一緒に勉強して居るといふことが、何となく辛い藝  
術の努力を力づけた。

細君もかなり細い處まで清と敏子と敏子の戀人との心理  
状態を知つて居た。敏子が今度来ない前、清は軽い心持で、  
さうした心の状態を言つて聞かせたこともある。「何うだ、

面白いだらう、己ちやなくつては、鳥渡打てない幕だらう」  
こんなことを戯談半分に見つて見たこともあつた。「大丈夫  
だよ、お前などには、己の心が解りやしない。……十年も  
一緒に居て、子供の四人も拵へて、それで夫の心が解らん  
のだから、遣り切れんねえ」かう言つたこともある。  
『しかし心配するのも無理はないさ。かういふことは一足  
飛だからねえ、……一瞬間だからねえ。一時間——いや十分、  
五分でも其状態ががらりと變つて了ふんだからねえ。……  
しかし大丈夫だ』

笑ひながらこんなことも言つた。

細君とは女同志だけに、敏子は少しは立入つた話もした。  
細君を透して、清は敏子の心を知り得た。田舎に居る間も  
絶えず手紙の往復をして居たことや、「奥さん、もう其話

はよして頂戴、私は今それ處ぢやないんですから」と言つたことやら、其他種々のことを聞いた。

五月は暖かい南風がよく吹いた。其間に雨が降つたり、月が射したりした。夜は座敷も書齋も明るかつた。

十二

想像したとは違つて、事のない平凡な日が続いた。食後に文學の話をするなどもあるが、それとても大したことはなかつた。本を教へてやるやうなことはもう出来なかつた。

午から友達の家に出懸けてまだ歸つて来ないといふこともあつた。朝から小石川の兄の家に出懸けて行くといふこともあつた。しかし夕飯をすまして歸つて来るやうなことはなかつた。



それは敏子の友達でもあり、また敏子の戀人の親友でもあつた。敏子が親に伴れられて國に歸る時にも、いろいろと其間に立つて奔走した。清の作品の出た時にも、友人の爲めに宛を雪いだやうな文を書いて雑誌に載せたことがある。しかし清はまだ逢つたことはなかつた。

一度は清の居る時に其人が訪ねて來た。其時茶を取りに來た敏子の素振には、何處となく落附かないやうなところがあつた。其前に來た時にも、書齋の障子を堅切つて、河かコンコン内密話でもするやうに一時間ほど話して行つたさうだ。

「敏子さんには、澤山男のお友達があるのねえ」

細君はかう言つて何か探すやうに清の顔を見た。

食後に、「此頃は山田さんよく入らつしやるのね」細君が

何氣なくかう言ふと、敏子はちらと清の方を見て低頭して了つた。

清が座敷に立つて行つてから、「昔からの親友ですけれど、面倒なところがあつて、私、山田さん嫌ひよ——」敏子はこんなことを言つた。



清の周囲の家族なども三年前とは著るしく變つて居た。細君の里になる見附側の雜貨店には、依然として母親が見世番をして居るが、此頃では腰が目に立つほど曲つて、客に應對するのがいかにも大儀さうに見えた。別に家を持つた役所勤めの若い子息は、そのちき近所に住んで居たが、子供はもう二人になつて、其の總領の可愛い女の兒は、毎日のやうに、危ない電車の道をチョコ／＼と通つて、祖母さんの店に遣つて來ては遊んだ。

その家の五六軒先に、その姉になる軍人の未亡人が長い間住んで居た。敏子に取つては、路に添つた、その狭い格子造の入口は妙なからざるなつかしい追懐の種であつた。敏子は其處に少くとも一年は居た。其の路に向つた一間に、一閑張の机を据ゑて、英語の溫習をしたり、文章の練習をした。一番町にある英語の塾にも其處から通つた。髪に挿した白いリボンとハイカラな生々とした扮装とが、あたりの屋敷町の噂の種に上つたこともある。しかし未亡人はもう其處には住んで居なかつた。未亡人は一人娘が目白の學校に通ふ便宜上から、一つは其持家が度々一月も二月も明いて居ることがある處から、春の初めの頃に、此處から牛込の山の手の奥に引越して行つた。敏子が何かの次手に訪ねて行くと、快活な肥つた未

亡人は、

「まア敏子さん」と喜んで迎へた。

「秀子さんも見違へるやうになりましたのね」丁度學校から歸つて來たハイカラな一人娘を見てかう敏子は言つた。隣の家も前の家も皆な未亡人の持家であつた。隣の家には、清の兄の遺族がさびしい生活を送つて居た。家が頻りに明く時分、「何うも人任せでは仕方がない。お兄さんが亡くなつて、何うせ彼處に住んで居られないのなら私の家に入つて下さいませんか、家賃など廉くつても好う御座すから」かう未亡人が言つた。兄の妻のお三輪は、其時十九になる子息と姪になる不幸な女の兒とを伴れて移つて來た。財産もない兄の遺族は、清と、清の弟になる軍人との補助を受けて生活しなければならなかつた。

しかし、お三輪は矢張元氣であつた。

「此處等は今後家揃ひぢやがね。かう後家はかり出來ちや本當に遣り切れんがね」こんなことを言つて、大きな聲を立て、笑つた。

未亡人が引越して來てからは、お三輪は裁縫を持つてよく其家に行つて一日を暮した。未亡人は十年一日の如くに裁縫の手を留めなかつた。あらゆる苦勞や心配を裁縫に忘れるといふやうに他からは見えなかつた。路に向いた六疊の明るい部屋には、大きな裁物板を中央にして、裁縫を教はりに來る子等が、すらりと並んで居る。紅絹や銘仙や羽二重などが其處等一面に散ばつて居た。

お三輪の家では、敏子が行くと、「人のお世話になつて居ては、本當に何にもお構ひも出來はしないがねえ」かう言

つて鹽煎餅を茶請に出した。亡くなつた人の話を敏子がすると、お三輪も一緒になつて、やさしい人だつたといふことを盡さず話した。供へられた花が暗い佛壇の中に明るく見えた。

敏子が歸つてから、お三輪と未亡人とは、いろいろに其事を噂し合つた。

「よく親が出しましたねえ」

かう未亡人が言ふと、

「清さんも中々大變ぢやね、……男が居ちやねえ、危ないもんぢやね」

お三輪はかう言つて笑つた。

「しかし、それは大丈夫でせうけれどねえ」未亡人は言葉

を續いで、「あれであの人は中々しつかりして居ますからねえ、……もう前のやうな失敗は爲ないでせうけれどねえ」

「何うちやかわからん。」

お三輪は頭を振つて見せた。

清の噂が出ると、お三輪は、

「さう言へば、清さんも此頃は大分様子が變つて来たぢやないかね、……さばけて来たぢやないかね。……」

「段々年を取つて来ると、さう頑固にはかりもして居られないからねえ」

「そればかりぢやないかと思ふがね……此頃は少しは遊ぶんぢやらうね」

「まさか、さうでもないだらうけども……」  
未亡人はかう打消した。

未亡人のことを清が「姉さんく」と呼ぶので、お三輪も矢張り「姉さん」と言つて居た。時には「お姉さん」などと慇懃とらしい敬語を用ゆることもある。「お姉さんなどの真似は、そりやとても私などには出来はせんがね：あんな働者は何處に行つたッてありやせん。人の世話にならずに、どんく／＼残して行くんじやからねえ」こんなことを清や清の細君の居る前でよく言つた。

未亡人はまた一人娘の秀子の生立に心を盡して居た。昨年の春、蒼い顔をしてハンケチに薬瓶を包んで醫師に通ふ頃には、此上なく苦勞にしたが、此頃では大分元氣が出て、血色も心持も段々生々として來た。音楽が好きで、ピアノのヴァイオリンなどの稽古にいつも通つて居た。それに學校が學校だけに、萬事ハイカラなどが好きで、髪なども

常に流行を趁つて結つた。色の白い眼の綺麗な子であつた。

「家の秀には、何うかさういふことがないやうにと、私はいつでも心の中で祈つて居るよ、お前」

未亡人はかう清の細君に言つた

お三輪の家に居る男の兒は、秀子と同じ年で、中學校の四年に學籍を置いて居た。女の兒は昨年漸く小學校を卒業したばかりで、三つほど年下である。若い者の居る二軒の家は、いつも賑やかな笑ひ聲で充された。

秀子は袴を穿いて、風呂敷包を抱へて、早稻田の田圃を越して、いつも學校に行つた。途中で知つて居る人に逢ふことなどもをり／＼はあつた。秀子は敏子が山の中に伴れられて歸つた當座、叔父さんの家で取次に出で、その敏子の戀人を知つて居たが、此頃、早稻田の新開町あたりで其

顔によく邂逅した。

敏子を餘所ながら知つて居る秀子の友達が同じ級に一人居た。ある日、

「あなた、あの人もまた出て入らしつてね？」

「何うして知つて入らつしやるの？」秀子が訊くと、

「だって、私、逢ひましたもの」

かう言つて其友達は笑つた。

「何が可笑しいの？」

「だって、一人ぢやないんですもの」

「さう……、本當？」

驚いたやうに目を睨つたが、「何んな人？眼の下つた？：

紺紺の羽織を着て居る人ぢやなくつて？」

「さうよ」矢張笑つて居た。

「さうなの？本當？、まア」

秀子はそれを母親に話した。

さういふことが段々清の耳にも入つて來た。

其他にもいろ／＼聞き込んだことがあつた。何ういふ状

態になつて居るかそれは解らぬが、男と手紙の往復をした

り、一緒に並んで歩いたりするといふことだけは確かであ

つた。

かうした結果になるのは、豫期しない譯でもなかつた。

出京と戀人——父親もそれを第一の危険の理由にした。清

もそれを危まぬではなかつた。しかし、清は危険を侵して

も、猶ほその成行が見たかつた。

まさか今度は初めのやうな失敗を繰返すこともあるま

い。それに、清は其戀に關しては、寧ろ擁護者とならうと

思つて居る。互にしつかりとした考へを持つて、將來を期して一緒にならうといふのならば、いかやうにしてなりと父母の心を解くやうに勉めて違りたいと思つて居る。それだけ二人の恣な行爲を口惜しくも思つた。

しかしそれを糺して見やうといふ氣にもなれなかつた。それを敢てするのは、何だか餘り出過ぎたやうにも考へられた。

「自然に任せて置く方が好い。もう娘ではなし——」かうも思つた。

「實行上のことは私は知らない。馬橋との關係に就いても、當人の心次第、私は何うすることも出来ない。しかし、藝術の方面では出来るだけ御世話をして成功させて上げたい」かう父親に書いて遣つたことを清は思ひ出した。藝術——

苦しくなると、清はいつも藝術に通れた。

「巴渦の中に入つて了つてはいけない。其處には藝術はない。藝術の神は嫉妬深い、實行してゐるものゝ頭には決して宿らない」清はかういふことを絶えず言つて聞かせた。しかしそれを言ふ時には、その調子に一種の強い力が乾度籠つてゐた。敏子は陰を流るゝある暗潮の壓迫を成せぬ譯には行かなかつた。

敏子は斜に坐つて、頭を低れて、黙つてそれを聞いた。生々した其の眼は、時々清の方を見た。

時には、清の心が漲るやうに敏子の方に流れ寄ることもあつた。かれは度々一年前と同じやうな心持になるのを自分ながら恥しく思つた。その時分と比べると。今では無論餘程離れた心持で居られねばならぬ筈である。女といふも

の情の曲折も多少は知つたし、自己の心理を客観することは、修行も少しは積んだ積りである。しかし實際に當つては、それは何の効力もないといふことが段々知れた。清と敏子と馬橋と——この三つの心が絶えず觸れ合つて居るといふことも段々知れて来た。三人が三人とも三人のことを思つて居るといふことも知れて来た。

離れた心持になつたり即いた心持になつたりした。監督者といふことも考へた。あれほど父親を説いて出京させて、もしものものがあつては申譯がない。かういふ風にも考へた。けれど其自身が監督者として十分な資格を持つて居ないといふことは清自からも知つて居た。其處に行くと、かれはいつも考へない譯には行かなかつた。男の居る危険を便し

ても猶上京を勧めた心の奥をかれは解剖して見た。ある力に乗せられて行く餘儀なさを清は味つた。山田といふ其友達がまたある日の午後に遣つて来て、立關の處で敏子と立話をして、やがて一緒に事ありげに慌てゝ出て行つたといふ話を細君から聞いた時には、一層其力が身の四邊に押寄せて来たやうに感せられた。時には、座敷で筆を執つて居りながら、それに對する不安が何といふことなしに萌して來ることなどもあつた。夜は家の周圍を、誰かが彷徨つて居はしないかとさへ疑はれた。郊外の釋樹の林の中が想像されたり、柏木あたりの電車の停留場の近くにあるあやしい二階屋の一間が眼の前に浮んで見えたりした。細君も此頃夫が頻りに懊惱して居るのを見通さなかつた。

「敏子さんのことになると、貴郎は丸で調子が違つて来るんですからねえ」

かう細君が言つた。

「何うして？」

「何うしてッて……よく解るんですもの」少し笑ひ懸けて、

「何もそんなに心配なさらなくつたッて好いちやありませんか」

「心配しやせんさ」

「そんなことがあるもんですか」

細君は笑つて見せた。

氣難かしくなつたり、性急になつたり、喪心した人のやうになつたりするのを細君は常に見てゐた。一ところを見詰めてじつと物を考へて居ることなどがあると、

「それ、考へて居るぢやありませんか」

いつもかう突込んで言つた。其時は消はさまつて機嫌の悪い顔をした。

敏子の舉動にも何處となくそはくしたやうな處があつた。成たけ書齋に引込んで出て来ないやうにして居た。食事の時には、何か言はれやしないかといふ不安が、絶えずその態度を曖昧にした。物を書いたり書を讀んだりするやうな様子もなく、机の邊には、書きかけて丸めた半切の反古やむだ書をした紙などが一面に散ばつて居た。だらしない机に凭りかかつて、亂れた髪を後に見せて、じつと物を考へて居ることもあつた。

蒼いヒステリックな顔をして、頭腦が痛いと言つて居ることもあつた。



持病の肩が凝つたと言つては、國の母親から送つて寄した持薬を常に用ゐた。

一日、小石川の兄の處から電報が来た。スグコイとしてあつた。慌て、出かけて行つた敏子は、翌日歸つて来て、嫂が病氣になつて國に歸つたに就いて、後に手がなから、また少し手傳つて遣らなければならぬといふことを報じた。此間から兄の嫁が落附かなくつて困ると言つて居た。田舎から出て来て、望郷病にかかつたやうな處もある。かうも言つて居た。何か嫁の里との間に紛争が起つたやうにもあつた。

敏子は一時また兄の家に行くことゝなつた。

十四

茅ヶ崎の病人の容體は段々重くなつて来た。六月の初めには、院長ももう長くはあるまいといふやうな語氣を洩した。咳嗽が出て咳嗽が出て仕方がなかつた。耳聾に顔を入れて、眞赤になつて苦んで居る處に人々はよく邂逅した。廊下の隅に食堂らしい處があつた。見舞に来た客の内に、此處で病院の拙い飯を食つて行くものもあつた。清も一度其の冷めたい卓に坐つたことがあつた。其時、田邊の細君は其處に来ていろいろなことを話した。

「今一度は何うにかして、少しでもよくしたいと思ひます  
けれどねえ」

甲斐の無いことを染々とした調子で言つた。細君の送つて来た辛いライフを知つて居るだけに、清は一倍の同情を起さぬ譯には行かなかつた。財産とてもない後々のことまでも想像した。薄倅な田邊のことも思出された。

「折角、世の中に認められて、これから落附いて筆も執つて行かれる身になつたのに……かう言つた清は、涙が胸にこみ上げて来て飯などは咽喉に通らぬやうな気がした。

海水旅館には、大阪に居る田邊の弟が細君を伴れて来て居た。看病旁々書きに来て居る小説家の室には、いろいろな人が訪ねて行つた。十日ほど前に小説家やら雑誌記者やら新聞記者やら知人や十人近く病室に集つたのを記念と

して、病人をお婆さんが負つて、廊下の入口の處に併れて行つて、明るい光線の下に寫眞を撮つたが、今ではもうさうした元氣は全くなかつた。病室の扉には來客謝絶の札が掲げられてあつた。

同じ年代に生れて来て、同じやうな物の考へ方をして、同じやうな心の閱歷を経て来て、同じやうな女を戀して、同じやうなライフを送つて来た身には、其群の一人がかうして死んで行くのを、深い感激を以て見ぬ譯には行かなかつた。通つて来る病院への路、茅葺屋根の漁師の家、麥の赤く色付いた松原の間の島、美しく日の輝く初夏の海——かうした複雑した色彩が一層その背景を明かにして見せた。  
「まだ、何も爲ない中に……爲やう爲やうと思つて居る中に、人間は死んで行つて了ふんだねえ」

かう言つて陣幕が笑つたのは、まだ昨年の冬のことである。清はそれを染々と胸に繰返した。

梅雨に入つてから、鬱陶しい天気は續いた。泥濘の深い郊外の路を拾ひながら、清は海岸のさびしい暗い病室を想像した。

かれは新聞に載せる小説に毎日毎日追はれて居た。十年前に死んだ母親と其頃の家庭のことを書きながら、十年後の今日の境遇と思想との變遷を比べながら筆を執つて居た。「暫く病院に御無沙汰をした。今一二回書き溜めて、出懸けて行かう」かう思ひながら矢張り其日と追はれて居た。かれは一夜遅くまでかゝつて母親の死んだ後の混雑の一章を書き上げた。夜はもう十一時を過ぎて居た。雨がサツと降つて通つた。臥床に入つてもかれは長い間眠られなかつ

た。いろいろな過去のことが思ひ出されるやうな夜であつた。其處へ電報が来た。

友の死を報じた電報を、かれは雨に濡れながら門のくいを明けて受取つた。

十五

翌日、清が行つた時には、遺骸はもう病院から引取られてあつた。清は顔にかけてある手巾を取つた。眼を少し明けて苦痛の痕もなく、田邊は死んで居る。しつとそれに見入つた清の眼からは涙がこぼれた。

机の上の茶碗には、水が一杯満されてあつた。線香の煙は明放した一間に細く真正にさしのぼつた。此頃は珍らしい梅雨晴で、麥島や桑畑などに、朝の日影が鮮かに照り渡つて、波の音がプランコのある前の松林を越して聞えて來

た。

家の内は静かであつた。まだ東京から來るものもなかつた。細君とお榮さんと老母と、それに今朝清と一緒の汽車で來たある新聞記者の細君と、それだけの人達がおゆづりを縫つたり線香を上げたり臨終の時の話をしたりした。「貴郎に逢ひたがつて居りましたのよ、それは——」細君はかう話して聞かせた。清は早く來なかつたのを悔めた。

清が座敷の肱窓の處にぼつねんと座つて居るのが外からも見えた。やゝ色付いた麥畑を越して、瀧木の新しい縁が漲るやうな豊富な色彩を見せて居る。麥畑の間には、海岸に出る路があると思えて、其處を網を擔いだ漁師が肩から上を見せ通つて行く。薄い鼠色の交つた白い簾々とした雲の間からは、碧い溶るやうな空が覗かれた。

此處等によく見るやうな藁葺屋根の百姓家がその眩惑窓のすぐ向ふの處にあつた。水草の生えた井戸側には釣瓶が伏せてあつて、入口には鏡だの、鋤だのが懸けてある。女が一人、鍋と坐繰に向つて、せつせと糸を取つて居る。母屋に續いた小屋の低い屋根には、籠に入れられた藪が一二枚干してあつた。その真白な藪に日が美しく照つた。

子供が喧しいので、お榮さんがそれを伴れて、松原の方に出で行つたが、暫くして歸つて来た手には、しどめの花だの、撫子だの、名も知らない草花だのを束ねたのが持つて來られた。お榮さんはそれを机の上の茶碗の水の中に入れて供へた。

東京から一番先に遣つて來たのは、田邊が青年時代に崇拜したなにかし新聞の主筆であつた。此人の文名は十五六

年も前から文壇に聞えて居て、一時は青年から非常な崇拜を受けたことがある。今も政治社會の方面に立派な紳士として、理想的な新聞記者として名聲が頗る高かつた。清も會ては其文章を崇拜したことがある一人で、二三度逢つて其顔を知つても居れば、その新聞と田邊との關係に就てもかなり詳しく知つて居た。清は田邊から前の細君時代に於ける此人との關係を度々聞かされた。

丈の高い洋服姿は座敷に入つて來たが、やがて悲哀を帯びたハキハキした言葉は其の静かな一間に聞えた。

「一度來たい來たいと思つて居ましたがつい自分にかまけて、……かう言ふことになつて了つて……それに、新聞で見てもさう悪いやうに書いてなかつたものですから」かう言つて、顔にかけてある手巾を取つて見て、「ウム、ウム、

かうなつて了つては——』と悲しうに言つたが、すぐ元の通りにして座に戻りながら、『佛とは随分古い馴染だつた、東京に出るとすぐ私の處に來たんですから。……まだ若かつた、まだほんの坊ちやんだつた』

老母の眼を泣腫らして居るのを見て、『しかし、母さん。好い兒を持ちなかつた。佛もなか／＼豪い人物になつた。……こんな世の中から惜しまれるやうな兒を持つたんだから、母さんも本望だ』

細君と清とに向つては、『何か書き残して置いたものがあるッていふ話を聞きましてが……それは矢張小説ですか』  
『いゝえ日記のことです』  
*其の……*

かう清が傍から言つた。

『日記？』  
細君は立つて行つて、遺骸の側の押入を明けて、其處から風呂敷に包んだ原稿を持つて來た。

『二十五年から三十年頃までの日記です。貴郎のお社に居る頃のことや、日清戦争時分のこと詳しく書いてあります』清は傍からかう説明した。

『は、ア』  
かう言つて、其上の一冊を取つて、『はアこれは細く書いてある。よく斯様に書いたもんですな』處々を讀んで見て、『廿五年から卅年……フム成程……』主筆はある一節に

眼を留めた。  
其日記には、新聞社のことだの、前の細君との戀愛事件

だの、主筆に對する批評だの、總べて思つたことが遠慮なく突込んで書いてあつた。暫く見て居たが、

「これは面白い」高い聲で言つて、「これは立派なものだ。財産だ。得たいたつて得られない寶だ。これは一つ」と清の方を見て、「貴郎方——其時分を知つてる人に校訂して貰つて、世の中に出せば、立派なものだ。本當に好い形見だ」かう言つて、讀み懸けた處を伏せて傍に置いた。

笑を含みながら、

「其時分、父さんが社の應接間に來て、其事を私に話して行つたことがあつたです。少し女のことに関係したことで……」  
清に言ふでもなく、細君に言ふでもなく、主筆は田邊と

前の細君との戀のことを話した。誰の胸にも其時分のこと  
が考へられた。

「私などは何うも昔から人情のことは解らん方で、さういふことには考へがつかない。其時にも餘程後まで丸で知らないで居たです。ところがこの佛にまかせて置いた雑誌の校正が非常に間違ふ。どうも變だ、變だツて言つて、その校正の間違ふといふ處からその關係が私にも知れて來たといふ譯で——。何うも私などと違つて、話は旨い、阿子は上手、若い娘さんにはすぐ眼につくといふやうな人でした」

主筆は忙しうに見えた、やがて包の中から香笺を出して、「何か、私が御役に立つやうなことが御座いましたなら、何うか遠慮なく仰やつて下さい。……それに、社の者にも

誰か一人来るやうに申して置きましたから、何うかそれも遠慮なく御使ひ下さい」かう言つて歸つて行つた。

あとはまた元の午前の静けさにかへつた。波の音が微かに聞えた。清は細君やお榮さんの何彼と忙しい間を、獨り遺骸を前にして、傍に置いてある『日記』のところどころを讀んで見た。

『日記』は三十年の春に清と日光に行つた處で切れて居る。

『もう日記をつけることはやめる』思ふ處あるが如く、其時田邊は言つた。

日記に書いてある生活とそれから以後の生活とが比べて考へられた。

「奥さん、日記はこれで全部ですか？」

清は暫くして細君に訊いた。

「え、それだけでせう。他にいろいろ書いたものはありませんけれど」

清は日記を繰返しながら、

「お照さん、今、何うして居るんです？」

「何うして居りますかねえ」

「少しも居る所が解りませんか？」

「何でも呉とかに旅館屋のお上さんになつて居るやうな話ですけれど」

「一度、新聞に書かれたあの人と一緒になつて居るんですか？」

「さうでせう、乾度」

「子供は何うしたんです？一緒に連れて行つて居るんですか？」

「乾度さうでせう」



前の細君の従姉に當る人が、一月ほど前、清の勤めて居る社に電話を懸けて、

「病人がさういふ希望があるなら、一生のわかれだから、せめて子供だけでも逢はせて遣り度い」と言つて来たことがあつた。照子が夫を捨て、身を隠した時、其子が腹に出て来て居たことを、田邊は七八年後に知つた。

其時實はれて行つた田舎から、可愛い七八歳になる女の兒の寫眞を送つて来たのを今の細君の居る前で田邊は清に見せて、「定坊の姉さんが僕にはあるんだせ、君。不思議なことがあるもんだらう」かう言つて笑つて、「丸で思ひも懸けないことなんだから面白いさ。見給へ、何處か定に似てるだらう。……つまり懐妊して居ることを僕に知らさなかつたんだね。そこがああ女のえらい處だ。知らせると僕と

の關係が全く切れなくなると思つたんだね」すぐ言葉をついで、「今の妻の身になつたら、かういふことを聞いたら、随分不思議な氣がするだらうね、おい、何うだえ、何んな氣がしたえ？」と細君の方を向いて、「無論嬉しくはないだらう、さうかと言つて、妬けるほどの大問題でもない、烏渡櫻つたいやうな、酸ばいやうな氣がするだらうねえ」

「酸ばいは面白い」

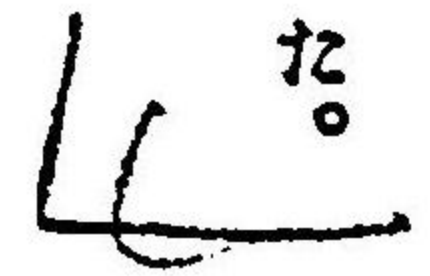
と其時清も笑つた。

清は田邊がら戀愛時代の照子の手紙を幾通か見せられた。田邊を捨て去つた後に寄した長い手紙も半分ほど讀んで聞かせられたこともある。照子から田邊に贈つた聖書は、綺麗な枝折が入れられたまゝ、久しい間田邊の書架の中に入れてられてあつた。

清は「日記」の頁を翻へして見た。  
 其處には丁度その戀愛時代の處が開かれてあつた。戀した二人が周囲の人々に壓せられ硬げられて懊惱したり憤激したりするさまが細かく書いてある。先程来た主筆に反抗した言葉などもをりをり其中に交つて居る。主筆は其戀に關して同情者でもありまた監督者でもあつた。ある時はその間を破壊しやうとする態度に出たこともあつたらしかつた。

清は熱心に讀耽つた。

其處にお榮さんが来て線香を上げて行つた。



十六

午後からは人々が集つて来た。  
 洋服姿もあれば、羽織袴もあつた。新しいバナマ帽を冠つた新聞記者、ハイカラな扮装をした雑誌記者、角帯をしめた書肆の店員——さういふ人達は、狹い家の中に入り兼ねて、縁側の處に立つて居たり前の松原の中を彷徨いて居たりした。  
 親しい人達は、病院から運んで来た寢棺を縁側から座敷に入れた。もう遺骸を棺に納める時が来た。細君達は骨折

つておゆづりを着せた。

病室から自宅の一室へ、一室から棺へ、棺から焼場へ。さういふことが人々の悲哀を更に新にした。平生物に動かない細君の眼からも涙がこぼれた。お榮さんは泣腫らした眼を手巾で押へて居た。

棺に納めやうとする時まで、老母は力にした子の遺骸に離れ難ないといふやうに、悲哀に寝れた老いた姿を其處に見せて居たが、もう堪らなくなつたといふやうに。

「秀夫！」

かうけたましく名を呼んで、身もたえして、いさなり冷たい遺骸に抱き着いた。

「秀夫、秀夫。」

暖れた母の呼聲と全身に涙も流つた悲哀とは、其面目な

ヒツソリしたこの一間の空気を動かさなからず動かした。何だかそれが餘りに芝居めいて見えるほど、其の光景は四邊に伴はなかつた。

人々は呆氣に取られたといふやうに、黙つてこの離れ難ない母子の絆に對した。見るに堪へないやうな心地を誰も感じた。

老母の眼からはふり落つる涙は、蒼白いぐたりとした田邊の頬やら頬やらを傳つて流れた。

「秀夫、秀夫！」

泣く聲が其呼聲に續いた。皺の深く刻まれた顔には、衰へた筋肉の顫動が歴々と見えた。

弟は次の間から飛ん下行つて、

「母さん、母さん」

かう言つて、遺骸から母親を離さうとしたが、老母は抱へた手を容易に離さうともしなかつた。弟の顔にはかうした光景をこの多くの人々の前で見せたといふことを耻ぢるやうな色があつた。

「秀夫、秀夫」と老母は猶かき口説いた。

「母さん、そんなことをしたつて仕方がないぢやありませんか」

細君だの細君の里の母親だのが弟と一緒になつて、漸くのこととて抱へた手を放させて、後から押すやうにして、老母を別室に伴れて行つた。

残つた人達は、其間に遺骸を棺に納めた。女達の探つて来た花を其中に入れた。長い間看護した病院の若い看護婦も其處に来て眼を泣腫して立つて居た。蓋をしやうとする

時、お榮さんは今一度と言つて、其顔を見て、暫く手巾で眼を押へて居た。

段々人が多くなつて来た。夕方近く、日が斜に松原に射し透る頃には、東京に用足に行つた誰彼も歸つて来た。新聞記者や雑誌記者は、故人の交友を彼方此方に要して、めづらしい話を聞かうとして居た。

やがて坐る處もないほど室の内は多勢の人で充された。其處に結飯が盆に盛られて出されたり酒の充された貧乏徳利が置かれたりした。縁側に腰をかけて、話をしながら、茶碗で酒を飲んで居る人もあつた。

老母はその多勢の混雑の中に小さくなつて坐つて居た。日はやがて暮れて焼場へ行く時が来た。

行列は静かに麥畑の道を出て行つた。もう昏くなり懸けた空の中には、晒布で巻いた棺が高く白く見える。焼場まで行かない女連は、家の傍の小高い處に一かたまりになつて見送つて居たが、中には歌麩の聲も交つて聞かれた。老母は珠数を両手で額の處に合せて居た。

運には漁師の娘だの、百姓の女房だの子供だのが多く集つて居た。「學者だつてな、若いのに惜しいことをしたなア」「肺病ッて言ふ奴は……」こんな言葉が其群の其處此處に聞えた。

送つて行く群の中に弓張提燈を持つて居る人も二三人はあつた。「提燈を持つたものは成たけ棺の傍に行つて呉れ給へ」誰かがこんなことを大きな聲で言つた。提燈の火は段々光を放ち始めた。

話聲やら足音やらが暫しとなくと夕暮の田舎道を賑にした。松林の傍を通つたり臺所の灯の明るい農家の傍を掠めたりした。丈の低い小説家と新聞記者との笑聲は、際立つて高く四邊に聞えた。

半晴れた夜であつた。暮れ残つた薄明りが西の空のらぎれた雲を鮮かに見せた。静かな夜風が麥の穂の上に吹き渡つて、をりをり螢が闇を縫つて飛んだ。

焼場まではかなり遠かつた。尠くとも一里半位はある。停車場から病院までの間は、度々見舞に來て誰も知つて居たが、これから先は人足が行く後について行くより他に仕方がなかつた。停車場や茅ヶ崎の町の灯を後に見捨て、さびしい東海道に松並木を暗い闇の中に見た時には誰も黙然としないものはなかつた。賑かな話聲や笑聲もいつか絶

えて、前へ急ぐ人々の足音のみ聞えた。

松並木の間の広い路がやがて前に開けた。其間にひっそりとした宿場らしい處もあつた。しかし葉葺の屋根の黒く兩側に並んで居るのを見るばかりで、戸を開放して居る家などは一軒もなかつた。人足は唯道を急いだ。

松並木の少時途絶えた處から、焼場へ入る細い路はわかれて居た。提燈を持った洋服姿が棺を昇いだ人足のすぐ跡に續いて行つた。其處には小松があつたり草叢があつたり麥畑がそれと微かに見渡されたりした。もう置き初めた夕露はわけて行く人々の衣の裾を濡はした。

松林と麥畑との間に一軒小さい家屋の立つて居るのを誰も皆な見た。人足は昇いで来た棺を一時其處に下したが、薄暗い二つ三つの提燈の光を取巻いて、ついて来た人々が

ぐるりと其處に立つ頃にはもう棺を其焼場の釜の中へ入れて居た。

『もうかうなつちやお終だ』

誰か後の方で、こんなことを言つたものがあつた。

しかしこの薄伴の詩人の最後のロマンチックな光景には、誰も心を動かさないものはないやうに見えた。誰も皆な黙つて、人足の火を點ける準備をするのを見た。

傍に立て居た清の顔が提燈の光にぼんやりと薄く見えた。人足は石油をかけた燃料に火を點する。火はチラホラと燃え出した。

それを見て人々は歸途に就いた。

西さんはこの六月の始めに、官用で九州地方に出張した。福岡、熊本、鹿児島、宮崎、この四縣を巡回する豫定であつた。出發する前、

「僕も病院に寄つて行かうと思ふんだけど。……寄らずに行くから萬事頼むよ。事に寄ると、もう達はれないかも知れない」かう清に言つた。清は西さんと田邊との此頃の心持を知つて居るので、達つて病院に寄つて行き給へとも勧めなかつた。

福岡からは博多柳町の繪葉書が来た。二階屋が海に並んで連つて居るところで、其上に、この俗氣紛々たる地もこの一區あるがためになつかしいふやうな文句が書いてあつた。筑前では朝倉郡から城壁のやうな耳納山脈を越えて、矢部川の谷の奥深く入つて行つた。征西將軍宮の末路と肥後の菊池一族の勤王の蹟とに深い興味を持つたやうな手紙も来た。西さんは古蹟を探る歴史家ではない、また名勝を探る漫遊家でもない、地方經濟の狀態を研究したり、同業組合の事業を奨励したり、町村自治の狀態を觀察をしたりする忙しい旅行家であつた。縣廳のあるところでは、彼方此方に行つて演説も爲なければならなかつた。宴會にも臨まなければならなかつた。農政學の講話もしてやらなければならなかつた。それに、旅行中は常に縣廳の屬官が跟

て歩いた。

熊本では阿蘇山に登った。山麓の静かな温泉場には、溪流が笛のやうな音を立て、流れた。「忙しき旅の中にもこの樂しき小閑を得申候、田邊の病氣如何」其處から寄した繪葉書の上にはかう書いてあつた。

三角港の海の中に小山の出で居る繪葉書も來れば、天草島の見馴れない海岸の港の繪葉書も來た。面白い處から處へと旅して行く暢氣さ加減が清には堪らなく羨しかつた。

連日降つゞく梅雨に濡れて行く旅の倦しさなどを書いて寄したこともあつた。

天草から再び本島に戻つて、八代から球磨川の谷に入つた。人吉から寄した端書には五箇庄近くまで其谷を弄つたことが書てあつた。それから加久藤越、櫻島、鹿兒島、其

處では學生時代の連中と一緒に歌を詠んだ昔の友達に邂逅したと書いてある。今一人の友達はこれから船で二日二夜懸らなければ行けないやうなわだつ海の唯中の島に居た。

月の末には、西さんは鹿兒島の西の田舎を視察する人であつた。縣道にはそれでも馬車があつたが、少し傍に入るに、草鞋がけで歩かなければならぬやうな處が到る處にあつた。芭蕉、椰子、蒲葵——日本では見られないやうな南國の植物が其處此處に繁つて居た。土地のものは、外國にでも來たかと思はれるやうな耳に遠い解らぬ言葉で話しかつた。

雨の降頻るある夕暮であつた。さびしい海岸から少し入つた矢張さびしいなにかし町に西さんは着いた。其處には東京からの手紙がかれを待受けて居る筈であつ



た。旅行の日割を彼れは豫め東京の親しい人々に知らせてやつて置いた。旅籠屋の女中はやがて受取つて置いた封書や端書を持つて来る。其中にあつた田邊の死を報じた電報はかれを驚かした。

薄倅な田邊の一生はこんな遠い田舎のさびしい旅籠屋の間でも考へられた。外には雨が蕭々と降つて居た。西さんは清に遺る端書を書いた。

十八

田邊の遺骨は、雨の降頻る日に青山共葬墓地に葬られた。翌日の新聞紙は筆を揃へて其の光景を報じた。中には其記事に二段以上を費したものなどもあつた。それほどかれの死は世に騒がれた。

清は其混雑の中で敏子の父親の上京したといふ報知を受取つた。御訪問したいがお忙しい御近状に遠慮するといふ風に其手紙は書いてあつた。清は葬式の済んだ翌々日出願けて行つた。

其兄の家は植物園の裏手に當るやうな位置にあつた。矢張雨は降つて居た。かねて敏子に閉いて置いた町の近くに來て、清は俣の幌の中から幾度か覗いて見た。小綺麗な新築の二階屋が其處にあつた。立關の格子戸を明けて案内を乞ふと、静かな足音を先に立て、やがて敏子が其顔を出した。

「まあ、先生」

嬉々として迎へた。

父親も二階の登口まで出て迎へた。丈の高い段の濃い莞爾した顔は二年前と變るところがなかつた。父親も清の變らない丈夫さうな顔を見た。

「實は今朝お出懸前に敏と一緒に御宅に出やうと思ひましたけれど……昨夜の御端書で、急に延ばすことにしまして

な

笑ひながら父親はかう言つた。昨夜、柳橋の川に臨んだ料理屋で清は二三の友達と小會をした。其時人々は興に任せて繪端書を書いたり藝者の扇に歌を書いたりした。其處から清は田邊の遺骸に侍した時に詠んだ歌を敏子に寄せた。「柳橋では、とても今朝は御宅にお居ることはないと思ひ

ましたけん……」

かう言つて猶笑つた。

此父親は敏子が西鶴文粹を纏いて居るのを見て、「娘の身でこんなものを読んで仕方がないな」と眉を蹙めたことがあつたといふ。その話をした時、「私などには西鶴はちつとも解りませんけれど、父親などには解ると見えますのねえ」かう敏子は清に言つた。父親は今でこそ堅い禁酒家だ

が、昔は三味線の一つや二つは弾いたこともある人で、敏子が稚いころ踊を習はせられたのも、矢張この父親の好みであつた。

「お友達でしたさうなが、田邊さんも惜しいことをしましたな」

こんなことも言つた。

敏子に關しては、

「何うですな、旨く行きますかな……貴郎があゝまで仰しやつて下さるから出すことにしはしましたがな、何うも危ないものぢやと思ひますがな……何うも私や母のいふことは少しも聞きませんけんけえ」敏子が茶器を運んで來るのを見て、「何うも分らなくつて困るですけん、文學の方を遣るなら遣るで、一生懸命に勉強すれば好いが、何うもそれも出

來ない。それなら文學の方は思切つて、嫁になるならなるで、いくらも親が好いやうにして遣るんですけん、それも解らんから困るですけん」

敏子は茶をつぎながら、父親と清の顔とを窺むやうにして見た。自分の身の上が何ういふ風に二人の間に話されるかを聞きたくもありまた聞きたくもないやうに見えた。

敏子は何となくそはそはして居た。

「貴女も此處に來て、父さんの話を聞いたら好いでせう……そして言ひたいことは話す方が好いちやありませんか」清にかう言はれても矢張敏子は落附いて其處に坐つては居なかつた。

「しかし、常人同士が眞面目にやらうと言ふのなら、お父

さんだッて、さう飽まで不同意だと仰しやるんではないでせう——」

敏子は膳を運んで来た時、清が父親に向つてかう言つて居るのが聞えた。

「イヤ、駄目でせうな……第一私は男が氣に入らんけえ……。普通の人なら、さういふ過も仕方がないッて許すことも出来るが、我々神の名に兄弟だと言つて居て、さうしてさういふ不都合をするやうな青年は、何うも頼もしくない」  
父親は笑を含みながら言つた。しかし其調子は強かつた。敏子は膳を清と父親との前に据ゑて、赧くした顔を低頭さ勝にして、すぐ階下に下りて行つた。  
「しかし、當人同士が好いなら、却つて其方が敏子さんの幸福ぢやないでせうか」

「幸福？親の意に背いて、幸福などが得られやう筈がない……。……かう言つて笑つて、『兎に角、私は此話には乗らんけえ……。貴方の御手紙にも、それは大丈夫だ、誓つて圓滿に事を運ぶやうにと書いてあつたけん、それで今回もまア上京させることにしましたが、とても駄目なら、今からでも連れて歸る」

「さういふ譯でもないですけれど……」  
清は後を濁らして黙つて了つた。

田舎の聲望家で、主人としても、父親としても立派な常識ある五十を越した老紳士とイブセンを讀んだり西洋の思想にかぶれたりした中年の男とは、かうして長く相對して語つた。清は其身と青年の群との間に超え難い崖があると同じやうに、矢張この老紳士と自分の間にもさうした障壁

のあるのを感じない譯には行かなかつた。  
 親と子との關係——イブセンが多くの作品に描き出した  
 その同じ親と子との關係が、少なからず此問題の中にも含  
 まれてある。「そんなことを仰しやつたって、子は子の好む  
 道にしか行きはしません」清はこんな處まで話を深く持つ  
 て行つて見た。

敏子は其間座敷に出たり入つたりして居た。吸物を浴へ  
 て來たり、ビールの抜いたのを持って來て清のコップに注い  
 で行つたりした。かうした話をして、父親は敢て激した  
 やうな様子もなかつた。荒爾と笑ふ顔には、さうした親の  
 權威を子に強ひやうとする人のやうには思はれなかつた。  
 段々話が碎けて來た。  
 後には、「まあ、しかし、いろいろのお世話を焼かせて、

困つた嬢さんですわい』などと言つて笑つた。

『先生がいくら仰しやつたって、お父さんには解らないん  
 ですもの』敏子は媚びるやうな調子でこんなことをも言つ  
 た。敏子が下に下りて行つた後で、

『何うも矢張私の教育の仕方が間違つて居たんですけえ何  
 も仕方がありません。今一人あとにあれの妹がありますか  
 な……さう貴方も御存じだ。あれは一つ旨く教育しやうと  
 思つて居ます。どうも餘り學問をさせ過ぎた。神戸などに  
 出したのが、矢張いかんのですわい。』

『さういふこともないでせうけれど』

『イヤ——矢張家庭で育てなければいけない。寄宿舎生活を  
 長くさせると、家庭を家庭とも思はなくなりすわい。：  
 何うもあれなどにしても、田舎に居るのが自分の宅に居

るやうな気がしないと見える。」

かう言つたが、すぐ話を更へて、

「矢張東京に居るんでせう？」

「さうでせう」

「何うもそれぢや危いものですね、清の顔を見て、『いつそ連れて歸りませうか』」

「それ程にすることもないでせう」

「何うもしかし信用が出来ませんな」

父親は考へながらかう言つた。

「何か、さうしたこともあるんですか？」

かう清が訊くと、

「いや——さういふ譯でもありませんがな……一人で出懸けることはよくあるやうです。此間なども、あの雨の降る

日に、田邊さんの葬式に行くと言つて出懸けて行つて、遅くなつて歸つて來ました。」

「餘程遅くですか」

「え、十時頃——娘の身で夜の十時頃まで戸外を出て歩くといふことは困るですからな。……それに、手紙の往復位はしてゐるんぢやないかと思ひますが——」

「さうですか」

清は他に言ふべき言葉もなかつた。覺束ないといふことは父親以上に感じて居た。しかし折角出て來たのを再び連れさせて歸すといふにも忍びない。それに惜しいやうな氣もする。

「其事は私からも敏子さんによく申しませう。敏子さんだつてまさかさういふことが解らん譯はないですから……此

事は矢張當人を信用するより他仕方がないですな」  
 「それぢやまあ、今少し貴郎に御任せすることにしますか  
 な——」

父親はかう笑ひながら言つた。

それからいろ／＼な話が出た。嫁が病氣で國に歸つた話、  
 何も此借家住居は不愉快で仕方がないから好いのがあつた  
 ら家を一つ買ひたいといふ話、田舎の別墅の話、そんな話  
 が盡きずに繰返された。ビールの二本目を抜いて敏子が其  
 處に持つて来た頃には、清はもう大分酔つて居た。

階下で玄關の格子戸の明く音がした。

「兄さん歸つて来てよ」かう小声で言つて、敏子は下りて  
 行つた。

少時すると、紺の背廣を着た敏子の兄が其處に上つて來

た。二人は初対面ではなかつた。四年前清が戦地に立つ時、  
 京都の停車場に態々逢ひに来て呉れたことがあつた。ボウ  
 イが、「服部さんッて言ふ方はありませんか」と客車の中を  
 呼んで歩いた。清は急いで客車の中から薄暗いプラットフォーム  
 オムに行つた。其時ハイカラな敏子の兄は初対面の挨拶を  
 して、林檎を入れた籠を一箇呉れた。其後京都の岡崎の家  
 を清が訪ねて行つたこともあつた。其家には敏子が學校友  
 達だといふ若い綺麗な細君と親切さうな婆とが居た。その  
 綺麗な細君は昨年の春頃心臓を病んで死んだ。清はその細  
 君の悔みから言はなければならなかつた。

十九

敏子はをりをり訪ねて来た。

非常に元氣の好い時があるかと思ふと、また時には蒼白い沈んだ顔をして居ることもあつた。心が絶えず動揺して居るといふことは、落附かない其態度に歴々と見えた。

「此頃は少しは勉強して居ますか」

かう清が訊くと、

「何うも兄の家に居ると、氣が落附かなくなつて何も出来ませんの」

敏子はいつもかう言つた。

清は座敷から書齋に机を移した。敏子の机は硯箱だの水入だのを載たまゝ、其一隅に置かれてあつた。書箱の上には、鏡が立かけられたまゝになつて居た。

清は其鏡に自分の顔を映して見ることもあつた。

探すものがあつて、押入の中に一杯入つて居る雑誌や本を整頓して居ると、其處から、ふと敏子の書いた短かい小説らしいものが出て来た。

題は「二人」としてゐる。

読む氣もなしに五六行讀んだ清は、容易に其原稿を攜くことが出来なくなつた。それには男と女との出會が書てあつた。婢が教へて呉れたので、何氣なしに女が出て見ると、其處に二年間會はなかつた男が立つて居た。其處は建仁寺



垣や扇骨木垣などの續いて居る屋敷町で、午後の静かな通りには、人の影も稀であつた。女は引れるやうに其男に跟いて行つた。

其近所に樹木の繁つた古い社があつた。二人は其處で種々なことを話した。二年前のやうな無謀なことはもうすまい……。もうラッどころではない。女はかう言つた。幾度となくさういふ風なことを言つた。「今、一二年は逢はずにお互に勉強しませう……。貴方はそれを誓つて下さるでせう。でなくては、私は東京に出て来た甲斐がありませんから」女はこんなことも言つた。しかし男は容易にこれに應じやうともしなかつた。

男の應じない心がことに清の心を強く衝いた。小説とは清には何うしても思はれなかつた。清は自己を

顧みない譯には行かなかつた。

しかし清は其問題に餘り深く觸れて見やうとはしなかつた。眞面目に考へて見れば、またそれをすぐ突崩した。

「行く處まで行かせやう……。自分は唯傍觀しやう。」梅雨は晴れて、段々暑くなつて来た。

梅雨は晴れて、段々暑くなつて来た。

女、花屋

七月の末に清は旅に出た。

旅に出て初めて此頃の身の周囲が振返られるやうな気がした。あらゆる刺戟物から離れた眼の前に、夕暮の碧の海が見えたり、繪のやうな海岸の港が開けたりした。

丘のやうな低い山には白い雲がふわ／＼と懸つて行つた。京都で費した一日が鮮かに眼に残つて見えた。鉄屋町あたりの大きな旅館の一間、其處には總のついた綺麗な小籠が襖の代りになつて居て、暑いキラキラする午前の日影が庭の縁に明かに照つた。當世風に髪は結つて居ても、威

のやわらかな明るい顔をした丁寧な若い女中や上さんに送られて、三人は車で見物に出かけた。威勢の好い車はカタカタと鳴つた。

三條の大橋を渡つて少し横に折れた細い通では、名代の京櫛を賣る家の古腰簾をわけて、京の商人らしい番頭に、すすき櫛やら髪かきやらを出させて女達の買て居る間を、紺の背廣にイタリヤンストロウの帽子を冠つた清は午近い日影のキラキラするのを前にしながら暫く立つて待つて居た。知恩院では高い石段をわざと三人は登つて行つた。登り終つた時、若い女の方はセイセイ呼吸を切らして、二人の方を見て笑つた。キーキーと鳴る鶯張は、女達を珍らしがらせたが、前に幾度も来て知つて居る清は、さうしたものよりもひろ／＼とした涼しい寺の空氣に心を奪れた。ところ

どころの圓柱に「ひる寝無用」と書いてあるのを見て、「成程此のひろい處で晝寝をしたら好いだらうねえ」などと言つて笑つた。出口の庭には白粉草が赤く白く咲いて居た。

清水では、五條阪の側の京の街を一目に見るやうな料理屋の奥の一間で午飯を食つた。清は淡く酔ひながら、かうした種類の女のことやら、敏子のことやらを考へて居た。清水の舞臺や、祇園の櫻や、八坂の塔や、殊に三十三間堂は女達の眼を喜ばせた。「京の三十三間堂の佛の数は三萬三千……」などと小聲で歌ひながら、其堂の内の暗い處を、はしやいで通つて行つた。

西本願寺から嵐山に行く路は、随分遠かつた。京の街を外れて、田圃に出ると、七月の夏の日は燃えるやうに車の幌の上から照り附けた。其處には小さい川があつたり、竹

藪があつたりした。燕子花の名所だといふ官幣中社の境内には、人の影も見えなかつた。車夫が傍にある車井戸で水を汲上げてゐると、清は暑さに堪へ兼ねたやうに釣瓶に口を當て、飲んだ。女連も其處に行つて水を飲んだり手巾を絞つて顔を拭いたりした。

嵐山の下の川には、人の居ない屋根船が一艘、繪でも見るやうに涼しい緑蔭にながれてあつた。

夜は駒下駄を鳴らして四條の納涼に出懸けた。電燈の明るい中をいろいろな人がぞろぞろと通る。橋際のビアホールには、舞子と藝者とお客とがビールを飲みながら騒いで居るのが明かに見える。晝間見た時にはこんな處で納涼が出来るかと思はれるほど殺風景であつたが、夜は驚くほど賑かで明るかつた。涼臺の灯と兩側の電燈とが一緒になつ

水に映つてそれがチラチラと綾をつくつて流れる。女達は綺麗な水に足を浸けたりなどした。

長い間に觸れまいと思ひつゝ觸れて行つた心を今までも考へて見たことも幾度かあつた。好奇心で始つたことが段々一種の親しい離れ難いやうな情になつて行く不思議さを、清は染々と経験せぬ譯には行かなかつた。

それから自由に開いて見た心の複雑した状態もかれには珍らしく新しかつた。自己の周囲に起る事件と人物、それに對するさまざまの異つた感情、眼の前を過ぎて行く種々の現象——それが眼まぐるしいほど早く早く廻轉して行つた。

二日一緒に居た女達と別れたのは大きな賑やかな停車場で

あつた。乗る人降る人でプラットフォームは混雑して居た。窓の處に清が顔を出して居ると、一度挨拶して別れて行つた若い方の女が再び戻つて来て、

「ぢや早く歸つて入らつしやい」

かう言つて笑つて、

「途中からも手紙を下さいね」

とつけ足して言つた。

汽車が出るまで、少し離れた處で、二人の女は白い顔を見せて見送つて居た。

別れた時は自由になつたやうな氣がした。これからは自分の旅だ。かうも思つた。深川で産れた女、頼りにならない性質の好い父と伶俐な氣の勝つた母とを持つて、十三四の頃から世の中の苦勞をした女、初めから節操を守ること